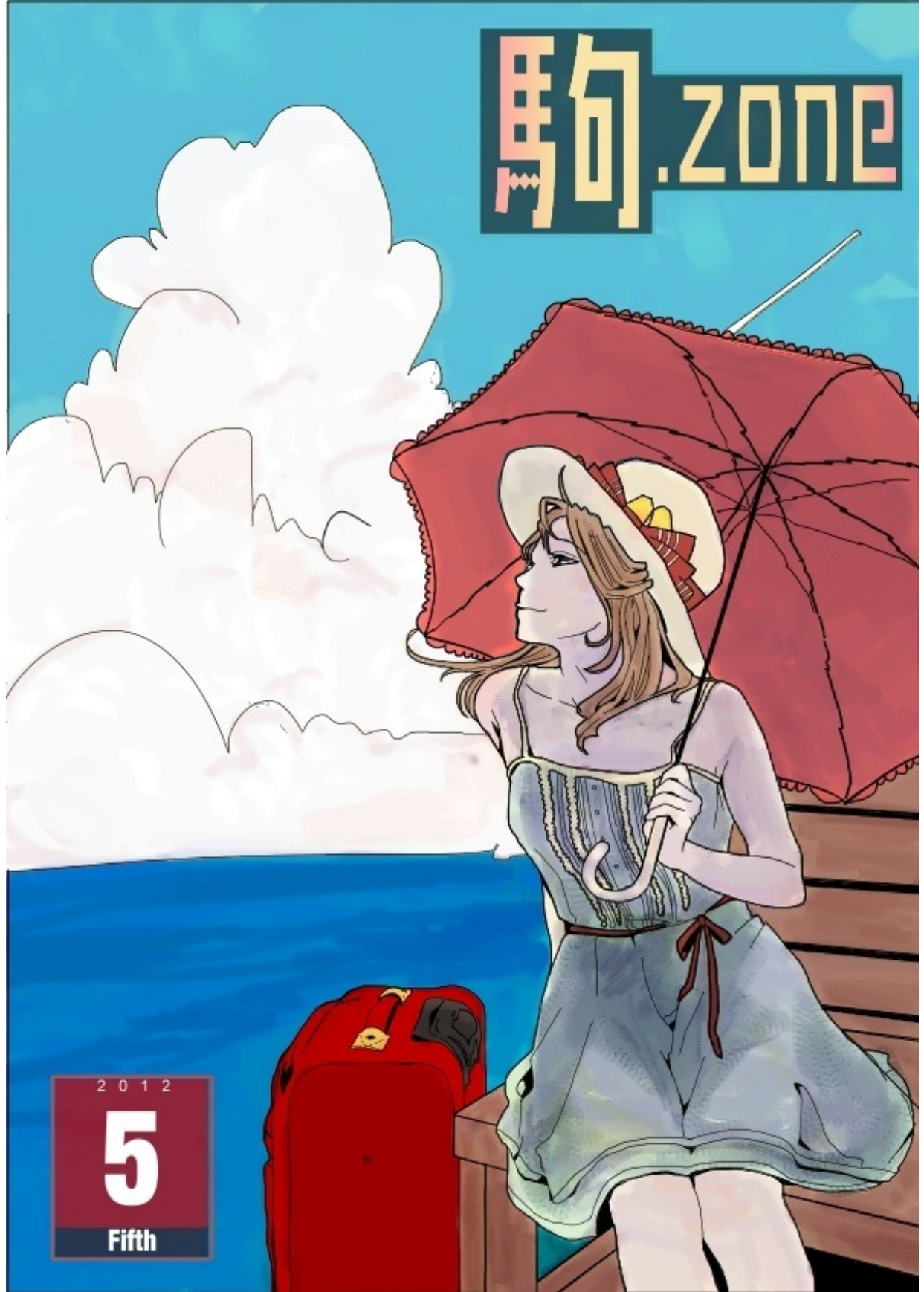


馬句.zone



2012
5
Fifth

駒.zone vol.5

駒とゴヤーとカヌーと台風 皆川許心

七割未満(五) 清水らくは

将棋短歌

イニシエーション 清水らくは

#将棋短歌

Life is lovely ジェームズ・千駄ヶ谷

どうしたの？ 辻村君

作者による「辻村創造」 清水らくは

敗戦後の形勢 上石三郎

〜ツクモさん、五割一分以上七割未満な番外編です！〜 贅楽夢

コンピューター将棋における強さとスペックの関係 ikkn

ふれあう将棋2 ふりごま

オーダー論考 清水らくは

駒とペンギンとおむすび 半島

書評『ものぐさ将棋観戦ブログ集成』 清水らくは

編集後記

作者紹介

馬句.zone

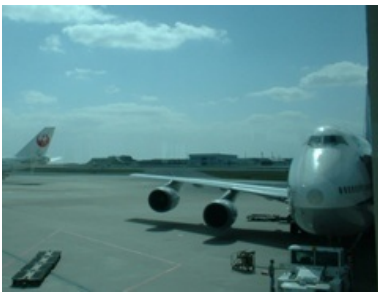
vol.5



夏の始まりのある日、私は那覇空港に降り立った。

皆様こんにちは、皆川です。今回は沖縄のある高校からご招待があったということで、私が行くことになったのよね。『駒.zone』初めての交流企画なんだけど、大丈夫かな。

沖縄に来るにあたり、木田さんに色々聞いてきた。彼女は何回か沖縄旅行してるみたいで、私にお勧めのところとかも教えてくれたのよね。自由な時間も結構あるから、回ってみようと思う。



空港は想像以上に大きかった。そして綺麗。外は思っていたより暑くない。湿気があまりないのかな。大きな旅行鞆を持った人たちがいっぱいいて、まあなんというか、カップルがやっぱり目立つわけで。予算の関係上とはいえ一人で来るのはやっぱりさびしい。

モノレールの駅にやってきた。ここから中心街まではこれに乗る。「モノレールは渋滞しないから」とは木田さんの言葉。列車がやってきた。これも新しくてきれいだ。発車してからの車窓は、周りに高い建物もなく、気持ちいい。

公園を通り過ぎ、街の中へ。美栄橋駅で下りる。ここをまっすぐ進むと国際通りなんだけど、そこは後回し。編集長も沖縄には詳しいらしく、「せっかくなのでみんなとは違う旅行記にしたい」なんて言うものだから那覇に宿を取らなかったのだ。そこまで言うならスケジュール作ってくれればよかったのに。

地図を見ながら、狭い路地を進む。そして一軒のレンタカー店に入り、小さな車を借りた。事前に予約していたものの、びっくりするくらい安かった。そう、今回の旅は自動車です。私は普段折り紙つきのペーパードライバーだけど、木田さんいわく「沖縄は走りやすいよ」とのことだった。

カーナビを起動して、目指すは北谷(チャタン、って読むんだって)。今日の宿はそこなのだ。

.....迷ってなんかないからね。



そんなわけで、北谷が近付いてきた。那覇市内でぐるぐる回ったりとか、斜め右に曲がるがわからなかったりとか、そんなことは全然なく順調に到着。本当に。

少し天気が悪くなってきたみたい。目の前に現れた観覧者。ここはアメリカンビレッジと言って、都市型の大型リゾートらしい。目の前を金髪のお姉さんがベビーカーを押しながら走り去っていった。さすが沖縄。

とりあえずホテルにチェックイン。部屋に入ると、窓から見えるのは広い海だった。これがオーシャンビューというのね。他人のお金で泊まるホテルっていいよね。

荷物を部屋に置いて、ぶらぶらとすることに。ビーチにはたくさん
の人、人、人。楽しそうね.....

なんか変なのみつけた。 いやあのね、水着を持ってこなかったわけ
ではなくてさ、なんていうか、ほら、ねえ。

スーパーに入ると、さすがの広さ。これも木田さんに教えてもらった
のだけれど、「お土産はスーパーで買うといいよー」とのこと。地元の人が食べてるものを、地
元の価格で手に入れられるから。そんなわけで沖縄独特の食材を物色。沖縄そばとかさんぴん茶
とか、たしかにお手頃価格という気が。



.....ただね、ゴーヤーはね。うん、ちょっと苦手。ただ、「沖縄行くんですか？ じゃあ、ゴ
ーヤー買ってきてくださいよ」って言ったやつがいるのよね。あいつのためになってわけじゃない
けど、まあ買っていてもいいかな。

「あ、東京の方じゃないですか？」

突然声をかけられた。びっくりした。振り向くとそこには小顔で淵なしメガネの青年がいた。
「えっと.....そうだけど」

「やっぱり。本当に失礼なんですけど、何かで見たことある気がして.....どこかで会ったことあ
りませんか？」

ひょっとしてナンパ？ いや、もちろん慣れてるけどね。

「ちょっとわからないなあ」

「お写真で見たのかも.....あ、浴衣を着ていたような」

「それは.....」

おそらく将棋祭りか何かのものだ。恥ずかしい。



「人違いだと思う」

そう言って私は、駆け出してしまった。逃げるが勝ち。

旅というのは恐ろしい。年下っぽくてメガネとか、あんまり近くにいる
と気を惹かれてしまうじゃない。

二日目の朝。宿を出た私は北へと向かう。天気は晴れ。

海岸沿い、気持ちのいい道が続く。ええっと、今日もオフなのよね。
でも「沖縄の魅力を取材ね！」って編集長から.....これ、仕事だよね？

しばらく走って、ハンドルを左に。ビーチを越えてたどり着いたのは
、残波岬。車から下りたら、風が強い。人はあんまりいない。



こんな所から落ちたらたまらないよね。別に高いところが怖いとかじゃないから。

しばらく波の音を聞く。

ひとつながりの海でも、いろんな表情を見せる。将棋もどこかではつながっているけれど、誰が指すかによって全く別のものになる。似てるのかもね。



さてっ、ポジティブにいこうかなっ。

残波岬を出て、さらに北へ。木田さんは言ってなかったけど、ぜひ見たいと思ってたものがあるのよね。そんなわけで、着きました、万座毛。車を降りてびっくり、露店が並んでいたり。結構な観光地なんだね。

岬と違い、風は穏やか。柵に仕切られた道を列になって進んでいく。遠くに見えてくる大きな岩。確かに、象の形をしている。

きりんとかパンダとかの岩はないのかな。

地元の人はいない気がする。確かに旅行に慣れた人は別のものを見たいかも。でも、一見の価値ありね。

沖縄は、広い。土地じゃなくて、空と海が良く見えるから、世界が広く見える。いつもどれだけビルや山を見ていたのかが実感できる。

今日の目的地はまだ先。まっすぐ北に伸びる沖縄本島が、ある地点で西にせり出し始める。そのあたりに名護がある。

ガイドブックに書いてあった沖縄そばの店に入って昼食。思ったよりもさっぱりとしていた。海や空気のきれいな上澄みを一つの器に入れたような、そんな味。

進路を西へと変える。今まで通ってきたところが左側に見える。随分と長い距離運転してきたなあ、と実感。ひょっとしたら私、うまいかも。ぐんぐんと進んで、皆と前の駐車場に車を預けた。ここからはフェリー。

やたらと広い待合室だけど、そんなに人はいない。チケットを買って、あたりをぶらぶらとする。目的の島は、すぐ近くに見えた。平べったいお好み焼きみたいな感じだけど、中心にごつごつとした山がによっきり生えている。不思議な島だね。

フェリーがこちらにやってくる。思ったよりも大きい。考えてみたら、今まで大きな船に乗っ

たことがないんだよね。ちょっとワクワクしながら乗り込んで、階段を上っていく。壁の外にも席があって、風を感じながら座ることができた。

動き始めた！

白波を立ててフェリーは進んでいく。地元の人が多いのだろう、私みたいにはしゃいで外を眺めている人はほとんどいない。不思議と海を見ていると、将棋盤を思い出す。波と波の間に、駒を置いてみたくなる。何百年昔には、船が戦のために行き来していたかもしれない。そんなことを考えていたら、あっという間に島が近付いてきた。港と、その周囲に広がる集落。ああ、離島に来たんだな、と思う。

着岸し、しばらくしてから下船の案内。ここが、今回の目的地。この島の民宿で、将棋合宿が行われる。そこに派遣されるゲスト棋士が私なのだ。まあ、沖縄には美少女が似合うという賢明な判断ね。

「皆川さん」

突然声をかけられてびっくりした。そういえば、宿の人に迎えに来てもらうことになっていた。けれども振り返った私の前にいたのは、予想だにしない人で、私は荷物を落としそうになった。

白く透き通った肌に、細い体。茶色い髪は肩のあたりで切りそろえられている。私は彼女を知っている。よく知っている。

「前川さん」

前川蜜、元奨励会員。同世代の中で最も強い女性だった。木田さんは奨励会試験に落ち、私は受けることすらなかった。当時は金本さんの存在なんて誰も知らなかった。女流棋界で活躍することを期待されながら、将棋の世界そのものから前川さんは姿を消した。どこに行ったのか、何をしているのかまったく知らなかった。

「お久しぶり。たまに活躍は聞してる」

「えっと……どうしてここに？」

「どうしてって、送迎頼んだじゃない。島烏で働いてるの」

「えっ」

島烏は、将棋合宿が行われる予定の民宿だ。そこに二泊することになっている。詳しいことはあまり聞いていなかったのだけど、従業員が私より強かった人っていうのはどういうことだ。

「聞いてなかった？ こっちの高校で将棋部に在籍したりしたの。そこから話が進んで今回の合宿につながったわけ」

強い日差しの下、日常のことを語っているにもかかわらず前川さんは世界から浮いて見えた。とてもきれいなのだ。嘘のようにきれいだ。それは、小学生の時からだった。決して慌てず、常にマイペースに生きていた。けれども芯が強いとかではなく、自分を装うだけの技術を持ってい

なかったのだと思う。男の子たちの中で一人凜として、前川さんだけが別の時代に生きているようだった。だから周囲は彼女からちょっと距離を置いた。そして後から考えると、前川さんは別に距離を取りたくなかったんだと思う。将棋は順調に強くなっていたのに、突然奨励会をやめた。一度だけ私に、「みんな、はつらい」と言った。

「なんか、不思議な話」

「そう？ けっこう、合ってるって評判」

前川さんは私を手招きして、白いバンへと誘う。

「さ、行きましょ」

「行くって……前川さんが運転するの？」

「勿論。無事故無違反。二か月目」

ハンドルを握ってにやりとする彼女は、やっぱり世界から少し分離しているように見えた。ただ、昔と比べたら随分と楽しそうだ。

「じゃあ、荷物載せるね」

「ふふ、変な感じ。皆川さん、プロなんだよね」

「そう。前川さんがプロじゃないのも……変な感じだけどね」

「そうかな」

トランクに荷物を積み、私は後部座席へ。前川さんのうなじは、背骨が見えるんじゃないかと思うぐらい白かった。

「じゃ、行くよ」



本島よりも、空が広がった。高い建物はなく、信号すらほとんどない。畑や林の中に工場。今まで見たことのない静かな美しさだった。

どこまでも平坦で、たった一つ山がそびえてたっていて。絵に描いたような光景とはこのことだ。こんなところで将棋を指せるのは幸せだろうね。

「ここ」

車が止まったのは、一見普通の民家かと思うような建物の前だった。木の看板に大きく「島鳥」と書かれている。

「なんかすごく、民宿って感じ」

「元々おばあちゃんがやってたんだけど、引退したの。今は私とバイトの人でやってる」

「前川さんが女将さんってこと？」

「はは、言われたらそうだ」

玄関で靴を脱ぎ、部屋に上がる。廊下の向こうに防砂林、そしてその向こうに真っ青な海が見えた。沖縄では、海は誰もが手に入れられる宝物だった。

「もうすぐ人が来るから。なんだったら指しておいて」

「え、そんな適当なの？」

「ここは、そういうところ。あ、泡盛は飲みすぎないようにね。飲みやすいけど、結構酔うから」

「私、そんなに飲めないから……」

「そう。あ、女子部屋はここね」

前川さんに案内されたのは、ごく普通の八畳間だった。部屋の中に夏の香りが貯まっていた。

「女の子が来るの？」

「何人か。島の人と、女子高生と、小学生。増えるかもしれないし、減るかもしれない」

「うーん」

なんというか、適当なのは苦手。でもまあ、しょうがないか。

「あと、皆にご飯作ってもらうの手伝ってもらわなくちゃ。皆川さんにも頼める？」

「うん」

部屋から出てくると、玄関から足音が聞こえてきた。

「蜜さーん」

「了君だ」

入ってきたのは、小柄で端正な顔立ちをした青年だった。

「頼まれてたもの持ってきたよ」

「ありがとう。こちら、女流棋士の皆川さん」

「わ、本物の！　こんにちは、今回お願いした高嶺了です！」

「こんにちは、皆川です。代表者？」

「あ、はい」

「彼氏なんだ」

前川さんはそう言って高嶺君の方をつかんだ。青年は顔が真っ赤だ。

「へー。可愛い彼女で良かったね」

「そ……そうなんです」

否定しないのかよ。何かとってもうらやましい。

その後、続々と人がやってきた。部活の関係者が多い。そこでわかったのだが、高嶺君は年齢は下だが学年は前川さんより上のようだ。

取材ということを思い出し、写真を撮ったりメモをしたり。そして豆腐を切ったり……？

「ゴーヤーチャンプルができましたよ」

高嶺君がテーブルに持ってきたのは、緑のゴーヤーに豚肉に卵、そして豆腐の入った料理だった。

「ゴーヤー……」

「チャンプル。島で出来たゴーヤーを使ってますよ」

実はゴーヤーを食べたことがない。苦いという話だけど大丈夫かな。

「カレーもできたよ」

「これ、ハンダマ」

テーブルの上にどんどんと料理が乗っていく。人の出入りが多くていったい何人いるのかわからないが、いつの間にか来ていたおじさんがすでに泡盛を飲み始めていたり、子ども同士で将棋が始まっていたりと本当に自由だ。

「じゃ、食べましょう」

前川さんの合図で、正式に食事が始まる。恐る恐るゴーヤーチャンプルに口を付けてみたが、おいしかった。苦味もあるのだけれど、それ以上に深いうまみを感じられた。他の料理もおいしい。

「あの……一局願いできませんか」

「いいけど、名前は？」

「光城です」

おそらくこの場にいる中で最も普通っぽい青年。ただ、眼光はとても鋭い。

「手合いはどうする？」

「飛車落ちとかでいいですか」

「了解」

旅先のせいか、久しぶりに駒に触るような気がする。誰かがジャンベを叩き始め、そして踊り始める人がいた。庭先に大きなヤドカリがやってきている。

「おっ、皆川さんに挑むとはやるねえ」

「せっかくですから」

ゆったりとした時間が流れている。そして将棋の方は私の完勝だった。飛車落ちというのは、実は上手の気が楽な手合い。こちらは受けに専念するので、飛車がないことはあまり影響がない。だから下手が攻めばかりしようとする、受けきられて反撃されてしまう。実は、ちゃんと囲って様子をうかがうのがコツ。

「あー、全然勝負になりませんでした……」

「途中歩の使い方は良かったんだけどね。終盤になってから急ぎすぎかな」

そのあとも将棋を指したり歌ったり踊ったり。こんな合宿は本当に初めて。

「皆川さん、溶け込んでる」

縁側に座しているところに、前川さんがやってきた。隣にちょこんと腰を掛ける。

「そう？」

「私はだいたい眺めてるだけ」

「それっぽい」

だんだんと静かになっていく夜。特別な時間は、ゆっくりゆっくりと流れていった。

三日目の朝。今日からはちゃんとしたスケジュールの元将棋をしていく……予定。

居間に行くと、すでに朝食が並べられていた。そして見慣れない女性の顔が。さわやかな笑顔にポニーテールが印象的だ。手足がすらっと長く、それでいて筋肉質。ちょっと憧れる体型。

「あ、皆川さん、おはようございます」

「おはようございます。あなたは？」

「崎原って言います」

「崎原さん、よろしくお願いします」

合宿と言いながら、地元の人がふらっと立ち寄ってくるみたいで、他にも昨晚観なかった顔がちらほら。

朝食を終え、いよいよ本番。主催者の高嶺君が仕切り、リーグ戦や指導対局が始まった。その最中にも人数が増え、なぜか私の前に三人の予定が六人が並んでしまった。

「ちょっと、前川さん」

「なに」

「半分任せる」

「え、私が？」

「そう、お願い」

前川さんは大会などには出ていないものの、普段から将棋は指しているという話だった。それならば子供に三面指しぐらいできるはずだ。

ちょこん、と私の横に腰掛ける前川さん。小さなころは、私より強かった。ずっとずっと、強かった。ちらちらと見てみると、今でも十分強かったし、駒落ちに慣れているようだった。おそらく部活動などで教えていたのだろう。

前川君や崎原さんが運営に回り、進行はスムーズだった。突然リーグ戦優勝決定戦の解説を頼まれたり、優勝者を三線の演奏で称えたり。色々なことがすべて楽しい。

「よし、将棋はひとまず終えよう。せっかく晴れてるしみんなで海行こう」

高嶺君の一言でみんなが浜に向かった。透き通るような、突き抜けるような青が広がっている。

「皆川さん、こっち来て」

「何？」

みんながはしゃぐ中、前川さんに手招きされて岩場の陰に行く。

「将棋、楽しい？」

「そうね……楽しいかな」

「良かった。私もね、いろいろあって辛かったけど、将棋は嫌いにならなかった。あと、皆川さんもいい顔してるな、と思った」

「いい顔？」

「いろいろと充実してるんだらうなって。私はそっちの道を選ばなかったけど……ね、わかるでしょ」

「まあね」

足元を小さな蟹が横切っていく。よく見るとヤドカリや小さな虫がいっぱいいる。



「恋はしてる？」

「えっ」

「してるでしょ」

「なんで」

「きっと年下。私と同じ」

「ちょっと、なに決めつけてるのよっ」

「すごいお姉さんしてるもの。そこは私とちょっと違うかな」

太陽が照らす真っ白な前川さんの顔は、確かにお姉さんという感じではなかった。彼女は、何かの役割を背負うというよりは、ただ漠然とそこにいるだけで存在感がある人間だ。もしプロになっていたら、とても美しい、最も気高い棋士になっていたかもしれない。

「恋、してるよ」

私は言ってしまった。前川さんは、ゆっくり口を緩めて微笑んだ。

「あらら」

相変わらずの騒がしい夕食の中、携帯の画面を見ながら崎原さんがつぶやいた。

「どうしたの」

聞いたのは高嶺君。

「台風こっち来る」

「あ、予測と違うんだ」

「明日お昼頃からだね」

と、丁度その時スピーカーのがーがーという音が鳴り響く。

「明日のフェリーですが……第一便のみ運行となります……8時の便は運行予定ですが10時の便以降は欠航になります……えー、繰り返しますが……」

しばらくは静寂が続いた。そして、皆で顔を見合わせた。

「明日午前の予定は中止しなきゃいけないね」

「そうだね、帰れるうちに帰らないと」

そんなわけで、急きょ予定が変わり、合宿三日目のスケジュールがなくなってしまった。しかも朝8時の便に乗らないといけなくなった。

「明後日は動かないかもしれないし。よくあることだから」

前川さんは慣れた様子でまったく慌てていない。

「お客さんこれなくて大変じゃない？」

「そうね。でも、帰れなくなって何泊もしてもらうこともある」

「なるほど」

決まってしまうとそれに従って動くしかない。というわけで相変わらずの宴会が、続いていく

のだった。ただ、私は一つ気にしていることがあったのだけれど.....

四日目の朝。七時過ぎ、皆であわただしく動き始める。空模様もあわただしい。乗り遅れたら宿に缶詰めになってしまうのだ。

前川さんと高嶺君が車を出し、フェリーに乗る人々をピストン輸送。港に着いたら、皆で別れのあいさつ。

「また、来てもいいんじゃない？」

「そうね」

前川さんと、軽く握手をした。たぶん、同じ世界に居たらしなかったこと。

「じゃあ、気を付けて」

「うん。いろいろとありがとう」

島の人々に手を振って、フェリーに乗り込む。島から、離れていく。

本島に戻ってきても安心はできない。今日行く予定だったところに電話してみる。

「はい.....はい、あ、そうですか.....はい、わかりました」

しょんぼりだ。今日行く予定だったカヌー体験教室は、やはり中止ということだった。楽しみにしてたのに。

急に予定がぼっかり空いてしまった。そして明日には東京に帰らなければならない。考えていたら、携帯が鳴り始めた。体験教室からだった。

「はい」

「あ、今確認したらですね、カヌーは出せないんですけど、トレッキングコースだけは午前ならできそうなんですよ。で、一人だけ他のお客さんが参加予定なんですけど、もしよろしければいかがですか」

「え.....あ、はい、うかがいます」

予定とは違ったけれど、せっかくなので行ってみることにした。カーナビに目的地を入れ、ハンドルを握る。風が少し強いものの、まだ雨脚は弱い。沖縄最後の目的地に、出発である。



「この下の方にガザミとかがいるんですよー」

案内役のお兄さんが、朗らかに説明を続ける。私は耳を傾けながらも、居心地の悪さを感じていた。

「いやー、それにしても偶然ですね」

「は、はあ」

なんと、もう一人のお客さんは北谷で会ったあの青年だったのだ

「思い出しました、将棋の方ですよ」

「ええ、まあはい」

何とも気まずい。ファンというならまだしも、何日かたってようやく思い出すレベルで知られているというのはとっても微妙。

「皆川……さんですよ」

「ええ、はい」

「俺、薦原っていいですねよろしくお願いします」

「よろしく」

相手の勢いに押されっぱなしだったけれど、トレッキング自体は楽しかった。沖縄でしか見られない植物や動物を、身近で観察することができた。

「皆川さんは、将棋のイベントとか出るんですか？ また浴衣着たり？」

「え、えーと、まあそういうことも……」

「いやあ、いいなあ。俺も早く呼ばれたいなあ」

「え？ 何に？」

「あ、俺囲碁棋士なんで」

「なっ……あ、えーと、そうなんですか」

「いやあ、将棋の人と沖縄で二回も会えるなんてびっくりだなあ」

こっちがびっくりだよ。なんだろう、すごく複雑な気持ち。

待合室に戻ってくると、お兄さんの一人が三線を弾いてくれた。とてもいい声だった。ただ、風の音が強くなってきている。

「あの、帰れるうちに那覇に戻ります」

「そっか、それがいいかもね。薦原さんは？」

「俺はしばらく名護に泊まるんで」

別れを告げて、車に乗る。色々あったけれど、楽しい一日だった。たぶん今から雨が強くなるし、ホテルに着いたらおとなしくしているのがいいだろう。明日は昼の出発までのんびりお土産でも見てすごそう。うん。

五日目の朝。飛行機が欠航になった……

外はひどい風雨。出かけるのはちょっときつそうだ。仕方ないのでノートパソコンを取り出し、今回の旅行記を書き始める。幸いネットも通じているので調べ物やメールチェックもできる。

ふと、気になって。「囲碁の薦原」について調べた。

関西所属の二段。特に目立った活躍をしているわけではないようだった。誕生日は12月2日……
「一緒じゃない……」

なんと、生まれた年も同じだった。もやもやした気持ちがもっともやもやしてきた。

六日目、夕方。東京に戻ってきた。色々あったけれど、帰ってきてみると単純に楽しかったと思える。出会いあり再会ありアクシデントあり。旅っていうのもいいものね。

後日.....

「え、これを俺にですか？」

「だって辻村、ゴーヤー欲しいって言ったじゃない」

「言ったかなあ.....」

「言った。言ってもなくても喜んだらどうなのよ」

「.....ありがとうございます。で、どうやって調理すればいいんでしょうか」

「知らない」

その後他の棋士に聞いたものの、ゴーヤーの調理方法を知っている人はいなかった。こんなことなら前川さんにチャンプルの作り方を聞いとけばよかった。

なぜか辻村は持っていた布の上にゴーヤーを乗せて眺め始めた。インテリアにでもするつもりだろうか。じっと見つめて、何やら考え込んでいる。そこに、三東先生が入ってきた。先生は辻村とゴーヤーを交互に見詰め、こう言った。

「どうしたの、辻村君？」



将棋が好きな少年、将棋に捕われた少女と出会う。

海の
81マス
清水らくは

島にやってきた少女、蜜は将棋が強かった。ただ彼女は、とても弱かった。島の少年了は、そんな彼女にも、そして将棋にも惹かれている。高校生になった了と、島に残った蜜。そんな二人の行く末は.....



/tmp/puboo/49971/193307/ee09894d4d920bc6c6bd/30828/epub/OEBPS/image/213C5262-A713-11E1-8459-E24EFFDA975F_m.jpg



七割未満(五)

清水らくは

最初、知らない人かと思った。よく見るとどこかで見たことがあるのだが、どこで見たのかがわからなかった。

「あ、今日のかぶらせてもらうので、よろしくお願いします」

爽やかな声でそう言われて、ようやく分かった。対戦相手の黍原さんだった。端正な顔つきに長く伸ばされたちりちりの髪。非常に格好いいのだが、髪の方は借り物である。イベントなどではよくふざけてかぶっているのは知っていたが、まさかテレビ対局でも装着するとは思わなかった。

スタジオ全体に微妙な空気が流れているのがわかる。まあそれはそうだろう。黍原さんの見た目自体は決して変ではないのだ。ただ、いつもと違うからなんか変なのであって、果たしてこれがオンエアされるとどんな感じになるのかまったく予想がつかない。

とはいえ、対局が始まってしまえば全く気にならなかった。盤が目の前にあれば、俺はその世界に集中することができるようだ。黍原さんも格好以外はまったく普通のままだった。かぶっている人は世間にいくらでもいるのだし、そういう人だと思ってしまえば問題ない。

ただ、いつ脱ぐのか……は少し気になっている。以前普通のテレビに出たとき、いきなり脱ぎ捨てて走り出すところを見たことがある。対局の礼をしたところで滑り落ちる、なんていうハプニングは起こらなかったが、投了や感想戦を始めるタイミングで脱ぐんじゃないかな、と予想している。

戦型は横歩取り。非常に難解な変化に突入している。研究していた局面からは外れていて、どちらが勝ちなのかはわからない。ただなんとなくだけれど、俺の方が苦勞が少ない感じ。短い将棋では、これは大事だ。黍原さんは難しい顔をして、何度か頭を揺らした。落ちないか心配だ。

心が落ち着いてくる。厳しく頭を回転させなければならないけど、心地良くもある。正解が、俺を導いている感覚がある。

ぴーんと、一本の筋が通った。これは負けない。ネクタイを正して、背筋を伸ばした。せっかくなので、キレイに映りたい。

「負けました」

黍原さんが頭を下げた。それでも落ちなかった。

「お時間が十分ほどございますので……」

淡々とした感想戦が始まった。結局黍原さんは被ったままだった。

そして、感想戦が終わり、締め挨拶をした後に解説の鳥越先生がにこにこした顔で言った。

「それにしても辻村君、珍しいネクタイだねえ。なかなかないセンスだよ」

かつらで対局する事に比べれば、ネクタイなんて全く無意味に思えるのだが、どうなんだろうか。

こけた。誰も見ていないようで助かった。

本当に何にもないところだったのだが、突然足に変なものが絡みついたような気がしたのだ。いや、何もないというのは嘘かもしれない。今は、退学届けを出した帰りなのだ。

高校には何の思い出もない。高校生棋士というのは重要なポイントだ、と偉い人に言われたのだけれど、そんなことのために在籍し続けるのはダサい。だからしばらくは、高校生のふりをしようと思う。結局のところ、制服を着ていればいいのだ。おしゃれに制服を着こなすというのなかなか乙かもしれない。

とはいえ、今俺の制服は砂が付いてしまっている。あとでクリーニングに出そう。

肩の荷の方は下りた。みんなが行くから行く、ただそんな感じで高校に入っただけだった。でも自分は、みんなと違う道を歩き始めている。たまたま才能があって棋士になったわけではない。気付いたときには、将棋に人生をかける覚悟ができていた。だから、将棋以外のことはすべておまけで、それに足を引っ張られる必要はない。

とはいえ。俺ってまだ若いよな、と思うことはある。先輩たちは俺の知らないことをいろいろ知っている。勝負においても、「そんなのが有効なんだ」ってことを仕掛けてくる。かつらなんてのはお遊びの内だろうが、扇子とか飲み物とか、時には空気清浄機までが勝負を左右する。ああいうものは、まだ俺には使いこなせない。

そんなわけで、自分にも使いこなせそうなものを買いに來た。水筒である。暑い季節は冷たいものを飲みたくなるが、対局の度にペットボトルを買っていくのもなんかかっこよくない。そこらへんこだわっている人は少ないので、バーンと見栄えのいいものを用意して、自分に最も合ったドリンクを持ち込もうという計画だ。

ショッピングモールに着くと、平日昼間ということもあって若者の姿はあまりない。すでに学校をさぼっているわけではないのだけれど、制服なので少し罪悪感がある。あと、砂がちゃんと払いきれているかも気になっている。

スイーツやバッグや靴、入浴剤のお店などを横目にエスカレーターを上がっていく。目指すのは輸入雑貨の店だ。そこはおしゃれだけでなく、使い勝手のいいものもたくさんあるので最近のお気に入りである。

「あれ、辻村？」

突然声をかけられた。聞き覚えはないのだが、無視する理由もなかった。

「はい……えっと、誰？」

振り返った俺の目に飛び込んできたのは、おおよそ知り合いとは思えない女の子だった。髪の毛はツンツンに立っていて、耳には大きなピアスが光っている。口紅はべったり、眉毛もしゃっきり。首にもじやらじやらとしたものがあり、スカートはとっても短い。一応高校の制服のようだが、見覚えはなかった。

「ちょっと一、忘れたの？ 中学校の時一緒だったのに」

「中学校？ うー」

もはや忘却の彼方だ。学校の記憶はとても薄い。

「ひどい。私よ私、沖原」

「おき……はら……」

記憶の扉をいろいろと開けてみるが、なかなか見つからない。だいたい俺は将棋以外の記憶力はたいして良くないのである。

「本当に覚えてないの？」

「ごめん」

「そっかあ。ま、あんま喋ったこともなかったか」

「あんま……ってことはあるのか」

「あるよー、ドボルザークの話したじゃん」

「ドボルザーク……？」

記憶の扉が、合図をしている。ドボルザークの話題をしたと言え、中二の頃だ。まだクラシックなんてたいして聴いていなかったのに、突然「辻村君、ドボルザーク好きそうだよ」と聞かれたことがある。その時は「えっと……聞かないこともないけど」と答えたような。

「……え、でもあれ……沖原さん？」

「どーゆーことよ」

記憶の中の彼女は、三つ編みに眼鏡の、音楽を聴きながら読書ばかりしている女の子だった。目の前にいるのはまるで正反対の人だが。

「きれいになったね、ってこと」

「何よそれ。ま、あの頃は学校ではおとなしくしてたからね」

「そういえば学校は？」

「……辻村こそ」

「俺は今日退学した」

「え、うそ。なんで」

「いや、特にいる理由もなくなったから」

「ふうん」

だんだんと記憶がよみがえってきて、クラスの沖原さんと目の前の沖原さんの共通点がわかってきた。左頬のえくぼ、少し大きめの口、良く動く左手。そういうところは、前と一緒に。

「じゃあ、沖原は単純にサボりなんだ」

「そうね、まあ……そうね。辻村は買い物？」

「ちょっとね」

「なにになに」

「いや、水筒を」

「ここで水筒？ いっがーい」

「そう？」

「私も見る」

「え」

沖原さんはニコニコと俺のことを見つめるばかりだった。振り切るのも面倒なので、俺は歩き出した。ぴったりと横についてくる沖原さん。

「暇なの？」

「比較的。まー、あれだよ、家も学校も嫌いってところかな」

友達は、と聞こうとしてやめた。自分だって聞かれたくないことだから。

「あ、これかわいーよねー」

店の入り口に着くなり、沖原さんはマグカップにくぎ付けになっいる。白地に赤いラインが入っているだけのもので、どこがどうかわいいのかよくはわからないが、女の子はこういうのが好きなのだろう。

俺は適当に頷いて、目的のものへと向かった。立ち並ぶ水筒。普通の小さなもの、大きなもの、飲み口が独特な形のものなど豊富な品ぞろえだ。

「あ、これいいじゃん」

「え、かえる……」

いつの間にか横に来ていた沖原さんが手にしたのは、飲み口がかえるの形になった緑の水筒だ。こんなものが中継ブログに載った日には何を言われるかわからない。

「家で使うんでしょ？」

「家でも使いたくないけど、仕事で使うんだよ」

「仕事？ 就職決まったの？」

「将棋を指すのが仕事」

「……ショウギヲサス？」

「将棋。知らない？」

「将棋は知ってる。仕事になるのは知らなかったし、辻村がそういうの得意っていうことも知らなかった」

中学生の頃は目立たない上に休みがちで、周囲にプロを目指していることなどはほとんど伝えていなかった。だから、知られていないのは仕方がない。とはいえ将棋界のこと自体はもっと知られていてもいいと思うけど。

「得意なんだ」

「意外。色々と投げ出しそうなやつだと思ってた」

「それは合ってる」

結局は赤いラインが綺麗な、比較的シンプルなものを買うことにした。保温性に優れているうえに、洗いやすいということだ。

「おもしろくない」

「おもしろがるものじゃない」

会計を済ませると、沖原さんは携帯を俺に向かって突き出してきた。

「ん？」

「ん、じゃなくて。交換」

「なんで」

「なんでって……再会を祝して」

「はあ」

もうなんかどうでもよくなって俺も携帯を取り出した。ごめんねどうせメールを送られてきてもまめには返さないタイプなんです。

連絡先を交換して、アドレス帳を確認したら「035沖原花蘭」がしっかり登録されていた。

「からん？」

「そーよ。知らなかったの？」

「知らないよ」

「私は知ってたのになー、みっちゃん」

「誰もそんな呼び方してないよ」

「そう？　じゃ充君、私は今から予定あるけど、また今度呼び出すから」

「はいはい」

「じゃ、またね～」

手を大きく振りながらエスカレーターを降りていく沖原さん。どう考えても俺の記憶の中の彼女とは違う。ただ、そんなことはどうでもいいことだ。今俺は、将棋に関係のない人と久々に話したな、と思っている。ひどく非日常的なことで、びっくりしている。自分のことを気にかけるような人間が、実在するんだ。

誰だかわからない人たちが、通り過ぎていく。将棋を知らない人々が。

「おおっ」

ファミリアが声を上げた。俺も上げたかった。

目の前のつっこちゃんだけが表情を変えていない。読みぬけがないか、しっかりと確認しているようだった。その点に関しては俺が保証する。もう、逆転はない。

自玉に詰みがないので、勝ちのつもりだった。しかし、角を二枚捨てる筋で詰めろ逃れの詰めろがかかってしまった。まったく予想していない手順で、逃れようがなくなっていた。

「負けました」

「あ……ありがとうございます」

三回目の研究会にしての初めての黒星。もう少し時間がかかると思っていた。しっかりした内

容だった。

「勉強してるね。わかるよ」

「あ、いや……はい」

この将棋は、女性初のプロ棋士とかそう言った類のものではない。いずれ、追いつかれるかもしれない存在だ。普通にすれば、活躍できる。そういう芯の太い才能だ。かわいい外見の奥には、様々な鋭いものが隠されていると思う。そういうものに対して、敬意を抱きたい。

いつか、大きな場所で勝負をすることになるかもしれない。

結局この日は、つっこちゃんが全勝でトップだった。

「でも、次はこうはいかないから」

「が……頑張ります」

自分にとってこの研究会が身になるかどうかという不安は、解消されそう。後輩に追いつけないこと、それも大事なこと。

などと考えていたらポケットの中で携帯電話が震えた。沖原さんからだった。

<元気にしてる？ 今度仕事場観に行くからね！>

彼女はまだ俺の仕事がわかっていないらしい。それとも数少ない出場イベントを調べてくるつもりだろうか。

<あんまり仕事してないよ>

返信して気が付いた。俺、普段はすぐにしない人じゃないか。

沖原さんには返さなきゃ、そう思ったのだ。なぜだかはわからないけれど。

「皆川さんですか〜？」

せっきーがにやにやとした顔で聴いてくる。

「違うけど」

「なーんだ」

その時またメールの着信が。なんと、皆川さんからだった。

<明日、土産があるから。たまたま欲しいって言ってたもの見つけたから買ってきた。>

そういえば仕事で沖縄に行くと言っていた。ただ、何かを要求した覚えはまったくない。

皆川さんへの返信は少し保留。他の三人が注目の対局を検討し始めたので、それに加わった。

「え、これを俺にですか？」

「だって辻村、ゴーヤー欲しいって言ったじゃない」

「言ったかなあ……」

「言った。言ってなくても喜んだらどうなのよ」

「……ありがとうございます。で、どうやって調理すればいいんでしょうか」

「知らない」

なぜか皆川さんからゴーヤーを貰った。それにしてもゴーヤーとは。以前気になると言った気もするけれど、あくまで「調理済み」のものに関してだったはずだ。

でも、なんだろう、皆川さんはどこか嬉しそうだった。というより、なんか爽やかになった気がする。つんつんした感じは変わらないのだけれど、表情が柔らかくなって、余裕も感じられる。沖縄に行くとそうなるのだろうか。

そのあと、控室に来た人に聞いてみたのだが、ゴーヤーの調理方法はわからないままだった。袋から取り出して、直接触ってみる。足ふみマットにこんなのあるよね。

見ているうちに、その存在自体が面白くなってきた。この外観、そしてこの質感、なぜこんな風に進化したのだろう。そしてこれを食べてみようと思った人はどんな人だったのだろう。よく見るために、持っていた黒いバンダナの上に乗せてみる。緑色が鮮やかで、これなら部屋に飾ってもいい気すらしてくる。

「どうしたの、辻村君？」

振り向くと、三東先生がいた。目を丸くして俺のことを見ている。

「いやなんか、変だけどきれいだな、と思って」

「ゴーヤーが？」

「ゴーヤーが」

とはいえずっと見ているのも確かに変だ。そのままゴーヤーをバンダナに包んで、鞆の中に入れた。三東先生はちょっと覗きに來ただけだったようで、すぐにいなくなった。対局途中だったのかもしれない。

「そういえば皆川さん、来週対局じゃないですか」

「そうね……木田さんと」

「大一番じゃないですか」

「別に。いつもと同じ」

そうは言うものの、意識しているはずだ。二人は同年代で、女流棋士を目指すうえでも同じようなペースで勝ってきた。他にもう一人、前川さんという強い女の子がいたけれど、彼女は奨励会に入った後段に上がる前にやめてしまった。木田さんは奨励会試験に落ちたものの、女流棋士になることを決意してからはぐんぐん強くなっている印象がある。つつこちゃんにも負け、同年代のライバルには一歩差が開けられた感のある皆川さん。このまま負けっぱなしだと、上を向くことをやめてしまうかもしれない。

「そんなことないでしょ、勝ちに行きましょうよ」

「辻村？」

「木田さんに勝って、いずれ峰塚さんにも勝ちましょうよ」

「峰塚さん……」

現在女流のトップに立つ、峰塚女流四冠。かれこれ二十年近く、一番前を走り続けているのではない。三冠になったり五冠になったり、時折変動はあるものの常に複数のタイトルを所持している。背筋がピンと伸びて、男性棋士を含めても最も対局姿勢がいいという評判だ。

「俺は、いつか定家さんに勝ちます」

定家四冠は、男性棋界のトップに君臨する男だ。かつて七冠を達成したことがあり、やはりこちらも二十年近くトップなのである。最近では若手もちょくちょく勝てるようになってきたが、誰

一人タイトルを奪うには至っていない。特徴は、とにかくよく喋る。

「辻村、なんかまっすぐだね」

皆川さんの表情は、あまりいいものではなかった。ごまかすような微笑。少なくとも、トップに立つ人、トップを目指す人はしない笑み。

「まっすぐじゃない。常に近道を探してます」

「近道？」

「そうしないと、追い越せないから」

研究をして最善手を探して、それも大事だろう。けれどもそれでは、同じスピードでしか前に進めない。だから自分に合った、自分だけの道を見つけないといけない。まだ若いからとか言い訳していたら、あっという間に集団の中に埋もれてしまうと思う。

「……私、頑張れば木田さんに、勝てると思う？」

「勝てますよ。まだ全然たいした距離じゃないです」

今度は、普通の笑みを浮かべた皆川さん。

「いいこと言えるようになったなんて、辻村らしくないね」

今日の皆川さんもちょっとらしくないですよ、という言葉は飲みこんだ。何がらしいとか、そんなこと本当はよくわからないからだ。

「あ、いたいた、辻村君と皆川さん。丁度良かった」

今日はこんなことが多い。控室に入ってきたのは、いつも陽気なおじさん『将棋宇宙』編集部の橘さんだ。

「こんにちは。何かご用ですか」

皆川さんの声のトーンが急に落ち着いた。大人である。

「いやね、実は今度プロ中心の団体戦を企画しようと思っていて、その関東若手チームに入ってもらえないかと」

「はあ」

「私もですか？」

「そうそう。男性二人、女性一人でチームを組むんだ。もう一人は川崎君に出てもらおうかと」

「川崎さん……ですか」

「やるならできるだけ最強にしたいからね」

「それ……私でいいんですか」

「はは、僕は皆川さんを推してるから」

誌面用に見た目派手な人を選んだんじゃ……と思ったが口にしないことにした。確かにチームを組むなら、この三人には「意味」がある。

「それで、どのような形式になるんですか」

「四チームぐらいの総当たりで、3勝なら5点、2勝なら2点、1勝なら1点っていう風なのを考えてるよ。あとは関西若手チーム、ベテランチーム、奨励会チームを考えてるんだ」

「なるほど……俺はそれ、参加しますよ」

「……私も」

「そうかそうか、それはよかった。また詳細が決まったら連絡するから」

橘さんはよかったよかったと言いながら部屋を後にした。いつも本当に楽しそうである。

「辻村、断るかと思った」

「なんでですか」

「川崎君と組みたくないんじゃないかって」

「そんなことないですよ。皆川さんこそ、どうなのかなって」

「.....別に、楽しそうだからいいんじゃない」

単純に棋力で選ぶなら、木田さんを始め強い人は何人かいる。 皆川さんだってそんなことはわかっているはずだ。それでも、受けた。だからきっと、前向きな気持ちはあるはずだ。そして俺が予想するに、奨励会チームの女性枠は――

「じゃあ、いつ始まるかわかりませんが、その時は頑張りましょうね」

「もちろん」

雑誌にとっては企画の一つにすぎないだろう。けれども俺たちにとっては、こういうものが大きな転機になるのはよくあることだ。

これから、俺たちの力関係に何かが起こる。この波を、うまく引き寄せなければならない。

盤上に散らばった駒を、並べていく。しばらくして、皆川さんも駒を並べ始める。こうして、前進していけばいい。

将棋短歌

イニシエーション

落波

見よ駒が私のために輝いて早く指せよと促している

されどまだ流れを乱す彗星が宇宙を割いて駆け寄ってくる

三分の沈黙の後7六歩古よりの正義の儀式

伝説に残る勝負の中でなぜ瞬きをした記録の君よ

明日には重みが節理越えるので昼の予備が必要になる

その悪手神なら鉄槌下すはず試されている我の霊性

水を飲む音が記憶を惑わせる一時でいい五感よ黙れ

秒読みは悪魔を祓う儀式なれ二人は清き靈魂であれ

永遠が定めていたさ打ち歩詰め光の筋を遍く辿る

君は今敗者で最も美しい再びここで踊り狂おう

月も星も腐敗していく盤上の銀がむかえた断末魔から 半島

その駒を震える指で押しつけて百鬼夜行の寄せ筋辿る 跳馬

コンピュータだから強くて当然と言うなら教えろ「だから」の根拠を いっくん

音もなく羽を広げし龍王が吾をやさしく籠絡しけり ぴろち

特上の鰻を焼くさ喰わぬなら喰わせてみせよう俺の鰻を 半島

扇子持ち手駒に指図隠す口盤上でなら俺も王だと 狐

ゆつくりと棋譜を並べるそれだけで天野宗歩に会いに行ける 跳馬

「覚えといて、あたしあんたが好きだから」命短し恋せよ香車 半島

#将棋短歌

Life is lovely

Life is lovely

ジェームズ・千駄ヶ谷

0. プロローグ

「うわああああああああああああああああああああああああああああ」

6 畳間の部屋に叫び声が響いた。

同時に食いかけの焼きそばを吹いた。ゲホツと喉につまらせて苦しむオレ。だがそれも仕方ないというものだ。オレが五体投地して応援していた女流棋士、見築（みつき）つかさ女流 2 級がおもいつきしひどい手を指したのだ。これは間違いなく敗着だろう。コップの水を飲み、呼吸を整えながらも食い入るように画面を見つめるオレ。だが、見築女流が投了するまでにそれほど時間はかからなかった。

「はあ、つかさたん・・・」

残念でならない。女流棋士としてデビューして 2 年目、初めてのテレビ棋戦だったのに。昨夜はこの対局を宣伝するために自分の知る限りありとあらゆるネット媒体を動員し、「つかさたんのNOOK杯初出場を応援するスレ」まで匿名掲示板に立てて不眠不休で応援していたのだ。

「序盤で時間使いすぎちゃったからな・・・」

見築女流 2 級は一去年高校生プロとしてデビューし、若手の有望株として注目が集まっていたが、いい将棋と悪い将棋の差が激しく、今回のようにいい所なく負けてしまうことも珍しくなかった。去年までは”まだ高校生だから”ということで大目に見られていた面もあったが、高校を卒業した今期、トーナメントを勝ち進むことに期待が寄せられている。

『お疲れ様でした、時間がありますので初手から・・・』

テレビでは感想戦が始まっていた。見築女流の気落ちした様子が画面越しに伝わってくる。しんみりした気持ちで検討に耳を傾けるオレ。

だが、つらい感想戦が待っていたのは見築女流だけではなかったようだ。

第一に、オレの部屋は狭い。

第二に、窓を開けている

第三に、隣室に住むオバサンはうるさい音が大嫌いだ。

ーピンポーンー

やれやれ、こっちの検討も手こずりそうだ。

1.

休日の午後はネット将棋を指すのが習慣である。

オレは将棋オタクだが、ネットの世界では決して強い方ではない。何連敗もしてしまうこともよくある。

ピッ、ピッ、ピッ、カチッ

「ふんぎやあああああああああああああ！！！！」

オレは『投了』ボタンをクリックすると傍らにあった長〇有希の抱きまくらにしがみつки、ベッドの上に倒れこんだ。最終盤、自玉は必死、相手玉はいかにも詰みがありそうな形。しかし、指し手が間違っていたのか、そもそもはじめから詰みはなかったのか、敵玉はたくみに包囲網から逃れ脱出を果たした。

うぐぐ。これで5連敗だ。どうも流れが悪い。少し気分転換した方が良さそうだ。オレは赤髪ツインテールの美少女が描かれたTシャツに着替えると、『ジャッジメントですの』と書かれたキャップをかぶり、外出の準備を整え外に出た。

外に出ると強烈な日差しが照りつけていて、オレはうかつに外出しようと思ったことをすぐに後悔した。暑い。暑すぎる。目的地までは自転車を使ってさほど遠くない距離だが、この暑さでは途中で干からびて死んでしまうかもしれない。

玉のような汗を流しながら自転車にまたがり向かった先は、私立H大学アニメ同好会の部室である。オレはアニメなんて子供じみた娯楽にはさほど興味もないからこんなサークルに入っている理由など本来ないのだが、まあキャンパス内に自由にネットが使えてお茶も飲めて昼寝もできるような場所があると便利だからとりあえず所属しているような感じである。今だって画面の大きなデスクトップPCを使ってネット将棋を指したいという一心で自転車をこいでいるが、それ以外には特にこれといった理由はないのだ。もしも、もしも万が一そのPCに新しい学園生活シミュレーションゲームなんぞがインストールされていたら誤って起動してしまうかもしれないが、それはオレの意志がどうというよりも巧妙に偽装されたショートカットアイコンの責任と言うべきなのである。

さて、このアニメ同好会には将棋を指せる奴がオレ以外にもう一人いる。名前をナカムラといって、オタクで変態で少々ロ〇属性があることを除けば実にいいやつである。将棋の腕前もかなりのもので、オレとはいわば互いに切磋琢磨する将棋仲間といった関係なのだ。

アニメ同好会の部室がある学生会館のわきに自転車を停めると、オレは持っていたタオルで汗を拭きながら階段を昇った。

果たして目的の部室に着いてみると、中ではナカムラが扇子をパタパタと扇ぎながらお茶を飲んでいた。

「よう」とオレが声をかけると、

「やあタカハシ氏！この暑い中よく来られましたな！」とナカムラが応えた。相変わらずハイテンションな奴である。

「部室に冷房がついてて助かったよ」

「全くです。冷房の効いた部屋で熱いお茶を飲むのが、最高の贅沢ですな」

こいつ、そんな趣味があったのか。

実際の所、数年前まで部室にはエアコンが設置されていなかったそうで、そのときの部員たちのことを考えると同情を禁じ得ない。

「ちょっと気分転換したくなってね。今日は勝てなくて。」

「ネット将棋のことですか？最近の調子はいかがで？」

「なんか最近調子悪いんだよなあ。この間、見築先生も負けちゃったしさ」

「タカハシ氏は見築先生のファンでありましたね」

「隣のオバサンにも怒鳴られるし。」

「オバサンに？」

「いや、なんでもない」

「そういえば見築先生といえば、今度の渋谷将棋祭りにでるらしいですよ。わたくし、行くつもりなのだがご一緒にどうですか？」

渋谷将棋祭りはプロ棋士などが参加するイベントで、毎年開かれている。オレも何度か行ったことはあるが、今年つかさたんが参加するとは知らなかった。もし本当ならファンとしてぜひとも行かねばなるまい。

「それ、絶対行くわ。いつ？」

「次の日曜日に。席上対局の聞き手とかするらしいですな」

「解説の聞き手かあ。生つかさたん、生つかさたん、生つかさたん・・・」

「よだれが出ておりますぞ・・・では、ご都合が良いようならぜひ一緒に参りましょう」

「ああ、頼む。オレってほら、気が小さいからさ。一人じゃ緊張しちゃうと思うんだよな」

「いま気が小さいと申されましたか・・・？」とナカムラが呆れたような口調で言った。いや、オレはごく普通のことを言ってるだけだと思うのだが。

「まあそれはさておきタカハシ氏、さきほどスズキ氏がなにやらPCにインスコしているみたいでしたぞ」

「なにいつ。それは本当か！部室のパソコンを私物化しようとは不謹慎なやつだな。同好会の運営に必要なものかどうかチェックしないと。」

「うむ、有用性に乏しいソフトを勝手に入れられては困りますからな。早速調べるとしましょうか」

こうしてオレたちは、一夏の高校生活のあんなことやこんなことを模擬的に体験するソフトウェアの有用性について、遅くまで検討を続けたのであった。

2.

渋谷将棋まつりの会場は大勢の将棋ファンで賑わっている。メインステージの観客席もほぼ満員だ。オレとナカムラは会場中ほどに席を占め、目当ての席上対局が始まるのを今か今かと待っていた。将棋祭りに来るのは初めてではないが、憧れのつかさたんといっしょに対面できるかと思うと気もそぞろ、サイン会や指導対局ブースを見歩いている間も絶えずそわそわしている感じであった。普段はオレよりもテンションの高いナカムラにまで「タカハシ氏、少しは落ち着きましょう」と言われたほどである。

「いよいよですか。ドキドキするっすなー」

ナカムラに言われてステージの方を見ると、係員が座布団の位置やペットボトルの配置に微妙な調整を加え、司会と思しき女性がマイクを持って準備している。

「なんか鳥肌がたってきたぜ・・・。おつ、あれ富士伊九段じゃね？」

「富士伊先生ですな！こんな間近で見られるなんて」

ステージの方に気を取られていたが、解説の富士伊九段がさりげなく控え室のカーテンに隠れるように立っていた。ちなみに、ナカムラは富士伊九段の大ファンである。

「富士伊先生・・・。生で見るとよりいっそう神々しい」

「そうだな」

富士伊九段も気になるころだったが、オレとしてはそれどころではない。オレの目的はあくまでつか

さたんなのだ。

『お待たせいたしました、本日の席上対局です。両対局者のご登場です。そして解説して頂きますのは、富士伊穀九段、聞き手は見築つかさ女流２級です。どうぞ拍手でお迎えください』

アナウンスとともに控え室の黒いカーテンがさっと開き、対局者の二人と富士伊九段、見築女流がステージに向かって歩いていく。

「ふおおおおおおおおお、つかさたん！生のつかさたん！」

「落ち着きなされ」

「つかさた～んって叫んでいいかな？」

「本気でやめたほうがいいですよ、タカハシ氏。出入り禁止になりかねない」

「冗談だよ、冗談」

大盤横の定位置で待機しているつかさたんは、白のブラウスに紺のプリーツスカートという格好で、ひとときわ輝いて見えた。

「ほら、始めますぞ」

『振り駒の結果、先手は佐藤義満王将に決定しました。それでは、よろしくお願いします』と棋譜読み上げの小松菜女流２級が言い、対局が始まる。程なくして、大盤解説も開始される。

『富士伊先生、今日はこのお二人の対局となりましたが、お二人の印象はいかがですか？』とつかさたん。

「始まった一、始めましたな、タカハシ氏！」

「生つかさたんの生声、イイ・・・」

「そういえばタカハシ氏は声にもこだわりをお持ちでしたな？」

「目の前で・・・つかさたんが・・・喋っている・・・」

視野狭窄気味のオレに、

「どうやら別世界に行かれてるようすな」

ナカムラが呆れたようにつぶやいた。

対局は相居飛車の熱戦となり、終盤まで優劣不明な熱戦となった。オレにとって対局の内容など半ばどうでも良かったのだが、それでもプロの対局を間近で見ていると、自分まで思考の渦に引き込まれるような不思議な感覚があった。終盤ついに後手の王将が詰み筋に入ると、観客席のあちらこちらから悲嘆のようにも、安堵のようにも取れる溜息が聞こえた。やがて後手の大久保九段が投了を告げ、壇上は感想戦へと移っていった。

解説者を交えての感想戦の後、会場に予期しない局面が現れた。

『席上対局の方終了しましたが、ここでご来場の皆様に素敵なプレゼントがあります』

いつの間にか舞台に現れていた司会者がそう告げた。

『はい。私が揮毫した扇子を１名の方に差し上げます。』とつかさたん。

『センスのイイ扇子ですね』と富士伊九段。

『・・・・・・・・』無言のつかさたん。

『おや、少し分かりにくかったかな？今のはセンスがイイのセンスと、扇子の』

『富士伊先生、皆さん分かってますから』とつかさたんが抑揚を欠いた口調で言うと、会場から笑いが起こった。

『でもこれ、貴重なんですよ。見築さんの扇子はまだ連盟からも発売されてないですからね。ほぼ、世界にひとつだけの扇子ということになります』

めげない富士伊九段の説明に、観客席からおおっという歓声が起こる。

『何と揮毫してあるんですか？』と富士伊九段。

『日々是好日、と書いてあります』とつかさたん

『・・・・・・渋いですね』

『いえ、それほどでも』

『ではこの扇子を、1名の方に差し上げます』と富士伊九段が繰り返した。

「タカハシ氏、これはゲットせねば」

「しかし、抽選ってどうやるんだろう・・・？」

二人でそわそわしていると、

『私とじゃんけんをして、勝った方にさし上げまーす』

つかさたんの声が響いた。

おおおじゃんけんかよ、苦手なんだよじゃんけん。小学生の時からじゃんけんで負けてトイレ掃除やらされたりとかさ・・・だが今はそんな過去に縛られてる場合じゃないぜ。今こそオレの本気を出すとき、魂を燃やす時だ。オレは両手を顔の前で組み、精神を集中した。

「ふおおおおおおおおおっ」

「タカハシ氏、隣のお客さんがおびえてますぞ・・・」

隣の席のおじいさんがこちらと距離を置こうとしている気配がわかる。

だが、そんな瑣末なことに構っている場合ではない。つかさたんの扇子が賭かっているのだ。

『あいこは負けの扱いです。後出しはダメですよー。じゃ～んけ～ん』とつかさたん。

「つかさたんの扇子はオレが守る・・・はあっ！！」

つかさたん、パー、オレ、チョキ。まずは1回戦突破。

隣の中村はパーを出してあいこだったようだ。

「ふっ、愛が足りんな。愛が。」

「無念・・・後は頼みましたぞ、タカハシ氏」

すぐに次が始まる。

『じゃ～んけ～ん、ポイツ』

つかさたん、グー、オレ、パー。

『じゃ～んけ～ん、ポイツ』

つかさたん、チョキ、オレ、グー。

『じゃ～んけ～ん、ポイツ』

つかさたん、チョキ、オレ、グー。

『えーっとお、人が少なくなったので、勝ち残った方どうしてじゃんけんしていただけますか？』

みれば勝ち残った客はオレともう一人、中年のおっさんだけになっている。

おっさんはオレに目配せするとスッとその場で立ち上がった。

こいつ、できるな・・。だが、扇子はわたさん。

オレも立ち上がると、腹に力を溜める。オレの方を見た客のざわめきが耳に入ったような気もしたが、そんなことは気にしない。場を制するためには自分から掛け声をかけることが大切だ。偽物語で火憐ちゃんが言ってたぜ。

「じゃ〜んけ〜ん」

これでどうだっ

「ぼいっ」

オレ、チョキ、おっさん、チョキ。

あいこだ。

「あ〜いこ〜で」

「しよっ」

オレ、パー、おっさん、グー。

「うおおおっし！！」

思わずガッツポーズを決めた。勝った。

周囲からの拍手を聞きながらオレは壇上へと歩いた。

「おめでとうございます。えーと、お名前を伺ってもいいですか？」と司会者。

「はっ！自分、タカハシと申します！」

「じゃんけんで勝たれたご感想は？」

「つかさた・・見築先生のファンなので、勝てて本当に嬉しいです。」

「おもしろいTシャツを着てますね？」と富士伊九段。

「あ、ありがとうございますっ！これは、あのっ、これは、コマゾン戦隊コマルンジャーのクマ使いかえでたん、あと、この帽子は、第12話でかえでたんが宿敵菅田屋キンジロウから勝利した証として手に入れたバンダナで・・」

「なるほど、素敵なお召し物ですね！では、さっそく賞品の贈呈に参りましょう！」

なんか今司会者が強引に話題を変えたような気がしたのは気のせいかな？なんかお客さんも含み笑いしてるし・・

「ではタカハシさんこちらへ」

つかさたんの正面に誘導される。

「おめでとうございます」

「ありがとうございます」

いや〜、みんなの拍手が染みわたる。うれしい。それ以外に言いようがない。

「見築さんに何かメッセージはありませんか？何でもいいですよ。」と富士伊九段。

こ、これは大チャンスだ。で、でも何を言えばいい？急に言われても思いつかないぞ・・。くそ、どう

する・・・？うーむ、落ち着け、こういう時は心に浮かんだことを素直に言うんだ。それが結局一番いい。

「え、えーと、では、見築先生の好きなアニメキャラを教えてください。」

「・・・・・・・・」

後から聞いた話では、この時会場はある種異様な静寂に包まれたそうである。

「アニメのキャラクターですか？私、あまりアニメとか詳しくないんですよ。えーと、そうですね、クレヨンしんちゃんとかかなあ。」

いかにもその場で思いついた、といった感じの答えだった。もちろんオレが望んでいた展開ではない。

「クレヨンしんちゃんですか。いいですね。見築さん、アニメとか結構ご覧になられますか？」と富士伊先生がフォローを入れてくれた。が、

「えーと、私、アニメとか割りと苦手でえ、あんまり見ないんですよね・・・。はは。」

う・・・。そうだったのか。よく見るとつかさたんうっすら冷や汗をかいている。そんなにアニメ嫌いだったのか・・・。これはひよっとしてまずい展開だろうか。

「他に見築さんに何かおっしゃりたいことがありましたら」と富士伊先生。さすがお優しい。しかしオレは「あ、あの、応援してます。頑張ってください」と伝えるのがやっとだった。

客席に戻ると、ナカムラが駆け寄ってきた。

「タカハシ氏、何を質問するのかと思えば。見築先生ドン引きしてましたぞ」

「う、今は何も言わないでくれ。ほっといていてくれ・・・」

時間が経つほどに恥ずかしさが増してくる感じで、オレはもういたたまれない気持ちになっていた。

「ナカムラ、悪いけどオレ、先に帰るわ」そう言うとオレはそっと席をたった。ナカムラは心配そうに「大丈夫なのですか？」と聞いてくれたが、実際の所かなり動揺していた。

千載一遇のチャンスだったのになあ。後の祭りという言葉の意味を実感しながら、オレはとぼとぼと会場を後にした。

3.

先日の将棋祭りですっかり意気消沈の俺が心を癒すために向かった先は、そう、秋葉原。歌い、踊り、舞い、コスプレし、アニメグッズと同人誌を買い漁るための聖地。心の故郷といっても過言ではない。

今日のお目当ては、天然美少女とひきこもり少年の切ない恋を描いた話題作『玉のパンツを脱がないで』の抱き枕カバーと、最新の同人誌チェックである。オレは自分で言うのもなんだが秋葉原に関しては相当の専門知識を有しており、他の追従を許さない秋葉原通を自負している。本日訪れる予定の店は10軒程度だが、各店を最短距離で巡回するルートはすでに頭の中で出来上がっている。あとはいかにスマートに、効率良く、それでいて気品あふれる買い物ができるか。

秋葉原巡りは時に孤独な戦いだが、決して飽きることはない。上級者となった今も、訪れるごとにディープな世界が見えてくる。秋葉原道に終わりはないのだ。

午後5時を前にして、すでに6店を回り終えた。7店目に選んだのは同人ショップの老舗、『とらの貴方4号店』である。まずは1階の平積みされた新刊を一瞥する。問題ない。最新刊はすべて購入済みだ。続いてよどみのない動作でフロアを周回する。もちろん、未チェックの作品があれば足を止め、購入を検討する。そして、これはと思ったものだけを持ってレジに向かう。この間も無駄な動作は一切ない。全ては高度に洗練された流れるような動作で行われる。そして速やかに次の階へと向かう。これの繰り返し。地味な作業だが、同人誌売り場のチェックを怠ってはならない。思わぬ掘り出し物が見つかる

こともあるし、一度在庫がなくなってしまうと入手が難しい本もあるからだ。道を極めるには日々の地道な努力が必要なのである。2階の探索を終え、3階に移ろうと階段を登りはじめたそのとき、

バサバサバサッ

不意になにかが上から落ちてくる音がした。視線を上げると、本やDVDのケースが階段の踊り場にちらばっている。

「すみません、袋が破れちゃって・・・」

声の主は女性だった。とらの貴方といえば以前は男性客が多いイメージだったが、最近は女性も増えてきたのだろうか。「大丈夫ですか？」と声をかけながら、とりあえず足元に散らばっているDVDを拾い始める。やたらとイケメンな戦国武将が描かれているパッケージに思わず目が止まったが、それを注視するのは相手に失礼だろう。とくに気に留めた風もみせず、DVDと本を集める作業を淡々と続ける。最近こういった趣向の女性が増えているとは聞いていたが、実際にいるんだな。やっぱり。だがしかし、他人の趣味には干渉しない。それがアキバのルールだとオレは思っている。

「こっちの方に落ちてたのはこれで全部です」

そう言ってオレは集めた本とDVDを手渡した。

「あ、どうもすみません・・・って、あれ？」

「え？どうかされましたか？」

一度すれ違いそうになってから相手の声に振り返る。

今度はちゃんと目が合った。

『迂闊だった』その女性の顔には確かにそう書いてあった。

なぜなら

「見築先生？」

間違いなく見築つかさその人だった。

大盤解説の聞き手の時とは違って、ラフなジーンズにTシャツ姿だが、見間違えるはずはない。

「は、はあ・・・えーっと」

その表情からは、なぜ自分から声をかけてしまったのか、という後悔が見て取れる。

「お買い物中でしたか」

オレはあくまで冷静な態度で話しかける。一度話しただけのオレのことを覚えていてくれたのはこの上ない名誉だが、おそらく好人物としての印象ではないだろう。

「はは、まあ、そのようなものです。ええ。」戸惑いながら答える見築先生。

「袋、破れちゃってますね」

「はあ」

「私がお持ちしましょうか。リュックサックもありますし」

いずれにせよ、困っている人を見過ごすわけにはいかない。助けられた相手がオレでは見築先生も不本意だろうが、少しの間辛抱していただこう。

「いえ、いえ、大丈夫です、一人で持てますから」見築先生は躊躇していたが、一人で抱えられる量ではないように見えた。

「まあまあ遠慮なさらず。困ったときはお互い様です。それに秋葉原は私の庭のようなものです。薄い本を入れるのにぴったりの手提げ袋を売っている場所も知ってますよ」

とオレが説明すると、「薄い本とかじゃないですけど」と抵抗をみせながらもオレが手を貸すことを許

してくれた。

「で・・・どうしてこの店になったのか説明してもらえますか？」

「え、なにかおかしいですか？」

ドンツ、とテーブルを叩くつかさたん。

「どうして手提げ袋を買うためにメイド喫茶に連れてきたのかと訊いているんです」

「いや、だって売ってますよ、そこ」

オレが指さしたレジの隣にあるお土産売り場にはたしかに手提げ袋が陳列されていた。ただし、メイド服姿の美少女がぼっちりプリントされているが。

「あれを持って街を歩けと・・・？」

目が、目が怖いよ、つかさたん・・・

「あれ、見築先生フレンチはお好みじゃありませんでした？いやー、ブリティッシュ好きとは相当の通ですねえ。」

「突っ込んでるのはそこじゃない！あんなアニメ柄の手提げ持って人前歩けるかって言ってるんですよ！！！」

切れ味鋭いツツコミに思わず感心しながら、「まあまあ、そうおっしゃらず」とごまかしにかかるオレ。実際の所、メイド喫茶に連れてくるのが常識的でないことくらいオレもわかっている。だが、手提げ袋を販売していて、距離が近く、沈んだ気持ちが励まされる、という条件で脳内検索した結果、真っ先にヒットしたのがこのメイドカフェ「いもうとLOVE@アキバ」だったというわけだ。つまり、論理的な帰結なのだ。

程なくしてメイドさんが注文を取りにきた。

「注文は決まった？お兄ちゃん、お姉ちゃん？えへ♡」

小柄でかわいいメイドさんだ。

「え～と、お兄ちゃんは、"いもうとのらぶらぶジュース"で」とオレは注文を告げた。

「"いもうとのらぶらぶジュース"だね♡了解だよ♡お兄ちゃん♡」

メイドさんは、セリフの最後にこちらの目をじっと見てニコツと微笑んでくれる。さすがプロのメイドさん。一味違う。

オレは常連だから注文するのも慣れているのだが、つかさたんの方を見ると目を丸くしている。

「（見築先生、メニューを選んでください）」と小声で見築先生に伝える。

「（いや、選んでって言われても、メニューの意味がよく・・・）」と見築先生。

「（直感でいいんですよ！直感で）」

「何にするう？おねえちゃん♡」と満面の笑顔でメイドさんが再び聞いた。

「え～と、じゃあ、この"妖精さんが徹夜でつくったプリン"をお願いします」と何だか決意を固めたような口調で見築先生が言った。

「了解によろ！おねーちゃん♡」とメイドさんがこたえた。「それから、わたしの名前は"みおん"です。みおみおって呼んでね♡」

つかさたんの方を見ると、ぜいぜいと肩で息をしている。

「ずいぶんと呼吸が荒いようにお見受けしますが、今からそんな興奮なさっては最後まで持ちませんよ」

「興奮してるんじゃないです！心にダメージを受けたんですっ」

涙ぐみながら言われると少し悪かったかなという気もしてくるのだが、当然ここで疑問が浮上してくる。つまり、なんで秋葉原に来ていたのか、という疑問である。

「ところで見築先生、アニメ嫌いじゃなかったんですか」と問いかけると、見築先生はしばらく考え込んでいたが、

「あれは嘘です」と断言した。

「う、嘘ですか。随分あっさり認めますね。」とたじろぐオレ。

「別に隠してるわけじゃないですけど。アニメとかマンガは普通に好きですよ。ただ、イベントとかだと、ちょっとね」

なるほど。それは分からなくもない。

「プライベートではオープンなんですか。それじゃあ、薄い本も」と言いかけたオレに

「ストップ！それはまた別の話です。分かってもらえますよね？」とつかさたんは言い、こちらをじっと睨んだ。だが、本人は睨んでいるつもりでも、どちらかというと上目遣いで見つめられているようにも感じる睨み方で・・・つまり、オレにとっては萌えもだえたくなる表情でしかなかった。

「ありがとう、つかさたん・・・」

「は？」

やべ、思わず心の声が漏れたか。

しばらくして、注文の品が運ばれてきた。

「お持たせしました、お兄ちゃん♡”いもうとのらぶらぶジュース”だよ♡」

「らぶらぶジュースがおいしくなるおまじないをしま〜す。お兄ちゃん、わたしと一緒に『おいしくな〜れ☆』って言ってね♡」

メイドカフェ恒例、おまじないタイムだ。

ちなみにこのおまじない、人差し指をくるくる回し、ジュースに向かってウインクするフリ付きである。

オレは何とかみおんちゃんの指示通り「おいしくな〜れ☆」とおまじないを済ませ、次は見築先生の番となった。

「お姉ちゃんも一緒におまじないしてね♡両手を頭の両側につけながら」とみおんちゃんが身振り手振りを加えながら説明する。「『かわいい妖精さん大好き〜、萌え萌えぴょん♡』」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

オレも見築先生も思わず無言になった。こんなにハードルが高いおまじないがあるとは、正直な所オレも知らなかった。

みおんちゃんの説明によれば、『萌え萌え』のところで左右の手をパタパタさせ、『ぴょん』のところで小首をかしげるようにするのがポイントのようだった。

「・・・・それ、やらないといけないんですか」と静かに見築先生が聞いた。

「はい♡」とみおんちゃんがとびきりの笑顔で答えた。

やや沈黙があつて後、見築先生が決心したように「やります」と宣言した。覚悟の定まった表情だった。

「それじゃあ、いきますね♡『かわいいかわいい妖精さん大好き～、萌え萌えぴょん♡』」

みおんちゃんと一緒におまじないを唱える見築先生の姿を、オレは一生頭に焼き付けておこうと思った。

目的の手提げ袋をしっかりと購入してから店の外に出ると、「そろそろ帰ります。これ持って街歩くのも結構恥ずかしいので」とつかさたんが言った。

「そんなことないと思いますけどね」

とオレは返したが、つかさたんがこのデザインの手提げ袋を持っている姿はたしかに少しおかしい取り合わせに感じられた。

駅までの道を歩きながら、この出会いをなんとか次につなげる方法はないかとオレは頭を巡らせた。もう一度会って話ができるような、あわよくば、継続的な関係をつくれるような、そんな方法がないかと。しかしもちろん、そんなアイデアは浮かばなかった。

「タカハシさんは、このまま帰られるんですか？」と聞くつかさたんに、

「いや、もう少し買い物しようかと・・・・」とオレは曖昧に答えた。駅につくまでに、なんとかして話の糸口を見つけたかった。

考慮の甲斐もなく気の利いた口実も思い浮かばぬまま、秋葉原駅が目前に迫ってきた。

行動を起こすなら今しかない。

「あ、あの！見築先生・・・・」

オレは意を決して話しかけた。

「今度良かったら、食事でも行きませんか？」

「え？」

少し困惑した表情を浮かべるつかさたん。だが、この時俺はまだそれに気づいていない。

「実はオレ、ずっとまえから見築先生のファンで・・。その・・その・・ずっと憧れてて、だから、見築先生ともっと仲良くなりたいんです！」

「・・・・・・」

しばらくの間沈黙が続いた。

恐る恐るつかさたんの表情をうかがう。少し考えているような、困っているような表情にも見える。

「あ、あの、別にいますぐ答えをいただかなくてもいいんです。何かまたお会いした時に」

「いえ、そういうことじゃないんです」

「・・・・？」

つかさたんの返事は思いの外はつきりとした口調で告げられた。

「ごめんなさい、タカハシさんときちんとお話したのは今日が初めてだし、その・・・、ごめんなさい」

「・・・・・・・・！！」

ごめんなさい？どういうことだろう。文脈が分からない。なにか謝られるようなことをされただろうか？

だが——本当の所、意味はわかっている。ただ、理解したくないだけだ。心がそれを拒絶している。

「・・・・・・・・」

「こちらこそ、すみませんでした。」

オレは精一杯穏やかな表情をつくってそう言った。実際には泣きそうな顔に見えたかもしれないけれど。

そして、ゆっくりと後ろを向き、街灯に照らされた自分の影を見つめながら、今来た道を引き返した。オレがつかしたんの視界から消えるまでには随分と長い時間がかかったはずだが、引き止める声はなく、大通りからの喧騒だけがいつまでも聞こえていた。

4.

秋葉原を後にしたオレは、重たい足取りで行きつけの飲み屋に向かった。自宅の最寄駅の近くにある、いわゆる"隠れ家"的な小洒落たバーだ。『Bar 千駄ヶ谷』というのがその名前だが、店の所在は千駄ヶ谷ではない。マスターが将棋好きで、将棋会館のある千駄ヶ谷を屋号にしたのだそう。常連客にも将棋好きの人が多く、オレもその内の一人である。

店に入ると、マスターが出迎えてくれた。

「いらっしやいませ。おう、タカハシ君じゃないの」

「マスター、お久しぶりです」

ここのマスターは気のいい中年のオッサンで、いかにもバーのマスターといった感じの人である。いつも品のいい笑顔を浮かべ、客とよく話す。

今日は休日の夜にしては客はそう多くない。人が少ないほうが落ち着けるからオレ的には有難いのだが、つい経営は大丈夫かと心配になってしまう。

案内されるままにカウンター席に座ると、

「どうしたの、そんな泣きそうな顔して」

とマスターが心配そうに言った。オレはそんなに泣きそうな顔をしているのだろうか。自分では平静を装っているつもりだが。

「いや、マスター。それが、今日はいろいろありまして・・・」

「ほう、女の子絡みかい？」

マスターはことあるごとに「女の子」との関係を追求してくるのだが、基本的にオレには浮いた話などなく、代わりに購入したフィギュアの造形美などを語って笑いを取るのが大体のパターンであった。しかし、今回ばかりはマスターの質問が的をついていたので、オレは答えに窮することになった。

「いや、その、なんというか・・・」

「分かってるって！タカハシくんが現実の女の子と接点なんてあるわけないからね！さあ、何飲む？」

現実の女の子と接点がないと決めつけられると、それはそれで腑に落ちない部分もあるが、まあほとんど正しいのだからしょうがない。

「はあ・・・。じゃ、激辛三兄弟で。」

「はいよっ」

このメニューは少し変わっていて、「東海の鬼」とか、「受ける青春」とか、オリジナルカクテルに将棋にまつわる名前が付けられているのである。そのせいでカクテルの中身が何なのか分からなくなっているのが少し問題だが。

しばらく待っていると、

「はい、激辛三兄弟、おまたせ」

マスターがカクテルグラスをスッとカウンターの上に置いた。

「それで、今日はどうしたの？」

「まあ、いろいろと」と、適当な答えを返しておいてから、今日あったことをマスターに打ち明けるべきかどうか、オレは少し悩んだ。マスターなら親身になって話を聞いてくれるだろう。だけど、マスターに話したところで解決策が見つかるかどうかは分からない。

「実は、女の子にフラれちゃって」

小考の末、オレは今日あった出来事を打ち明けることにした。

「ええっ、君がかい？現実の女の子に？告白したの？」

とマスターはいかにも驚いたといったふうに聞き返した。

「そんなに驚かないでくださいよ」

「ほえ～、意外だねえ。君が。しかし、まあ、あれだ。若い頃はたくさん失恋していいんだよ。若者は失恋して成長するのさ。」

「そんな正論聞きたくないです」と格別にドライな酒を口に含みながらオレは言った。「若い頃は苦労するもの」とか「失恋が糧になる」とか、そういったフレーズは半ば聞き飽きているということもあるが、少なくとも今のオレに響く言葉ではないと思った。

「オレも若い頃はよく失恋したよ。だからまあ、タカハシくんの気持ちはわからんでもない。」

「でも、マスターにはちゃんと奥さんがいるじゃないですか。はあ・・・」

「ウチのはまあ、気づいたらいたって感じかな。君だっていずれは奥さんも子供もできるだろう」

「僕なんか結婚できるわけないです。妄想の世界の話ですよ」

結婚？結婚なんて考えたこともない。

「おかわり、どう？」

「あ、お願いします」

マスターがカクテルを作っている間、すっかり氷の溶けてしまったお冷のグラスを眺めながらオレは考えた。世の中のリア充と呼ばれている人たちは、オレとは決定的に違う何かを持っているのだろうか。それとも、単なる偶然によってその立場を手に入れただけなのだろうか。マスターに聞いたら笑って一蹴されるかもしれないが、今のオレにはそれすら分からなかった。

「はい、おまたせ」

「あ、どうも」

どちらにしても、オレが女の子と連れ立ってカフェに入ったり、手をつなぎながら夜道を歩いたりする様子は遠い世界の幻想のようで、想像することさえ難しかった。

「マスター、若い頃はさぞモテたんでしょうね」とオレは尋ねてみた。「そんなことないよ」とマスターは答えた。

「オレはね、遠くから見てるだけでいいですよ」と独り言のようにオレはつぶやいた。そうなの？とマスターがカウンターの向こうから聞き返した。

3杯目のカクテルを飲み干したあたりから、徐々に酔いが深まってきた。酔っている自覚はあったが、なかなか止める気になれなかった。

結局、オレは記憶がなくなるまで飲み続けた。

5.

『お兄ちゃん、電話だよ～。早く出ないと切れちゃうぞ～。お兄ちゃん、電話だよ～』

カチリ

ケータイの画面を見ると、ナカムラからの着信である。

「タカハシ氏！タカハシ氏！今どこにおられるのですか？」

「ん・・・すまん、今起きたとこだ」

寝ぼけ眼で答えるオレ。

「なんですと？今日は女流棋聖戦の大盤解説に行く予定のはずではありませんか！」

「すまん、自分で誘っておいて申し訳ないけど、オレはちょっと・・・」

「まーた、あなたという人は！朝の用事に弱すぎですぞ！」

ナカムラの声が耳の奥まで響く。

「いや、いいんだ、オレはもう。先に行っててくれ」

オレは逃避を試みたのだが、

「とにかく！あと10分で千駄ヶ谷駅に来てくだされ！頼みましたぞ！」

そう言うとナカムラは電話を切ってしまった。

秋葉原の一件からおよそ2週間後、女流棋聖戦の大盤解説にナカムラを誘ったのは、確かにこのオレである。つかさたんにどうやら嫌われてしまったらしいことは途方も無いショックだったが、つかさた人を応援したいという気持ちに変わりにはなかった。今回の大盤解説ではつかさたんは対局者なので直接顔を合わせることはないし、純粋な気持ちで応援できると思ったのだ。

それにしても、オレは朝に弱すぎる。朝といっても待ち合わせ時刻は午前10時だったのだから、ナカムラに怒られても言い訳の余地は全くないのである。

あと10分で会場に着くのはどう考えても無理だったので、オレは半ば開き直ってのんびり行く事にした。のろのろとベッドから起き上がると、回らない頭で身支度を整え、会場へと向かった。

会場についてみると、やはりというべきか大盤解説場は多くの人で賑わっていた。女流棋聖戦2次予選は4局同時に行われており、解説者も聞き手も大忙しだ。

人ごみをかきわけナカムラと合流すると、オレたちはなんとか空席にたどり着き、解説に耳を傾けた。

今日の解説は末崎遊八段、聞き手は茨城涼子女流四段である。

『では見築-板橋戦に移りまして。どうやら数手進んだようですね』と茨城女流。

『先手の見築さんが美濃囲いの石田流に組んだのに対し、後手の板橋さんが居飛車穴熊になっていましたね。お互い駒組みはほぼ完成していますが、ここで4八金寄ですか』と末崎八段。

『まだ仕掛けのタイミングではないということですか？』

『6五歩と仕掛けてもいい勝負になると思いましたけどねえ。じつと金寄りしましたね』

『この手はどういう意味でしょう？』

『後手は穴熊ですが、あまり良くない形ですね。一方、先手は石田流の理想形とも言える形です。見築さんは、じっくり指せば先手が良くなると見ているのでしょうか』

『なるほど。では後手としてはどう指せばいいのでしょうか？』

『後手の板橋さんは千日手でもいいわけですから。例えば9二飛として』

『先手は8八角ですか』

『ここで例えば7二飛車とかですねえ。それに再び9七角とすると』

『なるほど、こうなると千日手でしょうか』

ポンポンと指し手を進められて完全には理解できない部分もあったが、解説によると、どうやら千日手もあり得るようである。

「見築先生、先手番で千日手になってしまわれるのでしょうか」と言うナカムラに、

「大丈夫だ、心配ない。今日は勝ってくれるはずだ」と返したが、もちろん根拠などなかった。

対局は解説通り千日手含みの展開となったが、先手がリスクを省みず▲8五桂と桂馬を跳ねて千日手を打開した。続く先手からの▲7四歩△同歩▲6五歩という石田流の陣形を最大限に生かした仕掛けをきっかけにして、両者後に引けない本格的な戦いが始まった。

ほどなく解説は別の対局に移ってしまったので途中経過は分からなかったが、再び解説が見築-板橋戦に戻ってきた時には、どうやら先手の一手勝ちのようだと結論が出て、オレとナカムラは安堵の溜息をついた。

「見築先生、最後は腕力で押し切りましたな」

「パターンに入ると強いからな～。さすがだわ」

「でも、ドキドキしましたな～」

「オレは最初から見築先生の勝ちを信じてたけどね。うん。」

「それはどうですか？ケータイを握りしめて将棋クラスタの形勢判断を必死に探していたではありませんか」

「うぐっ」

言葉に詰まるオレ。夢中になって解説を聴いている様子だったが、よく気づくものだ。

「ち、ちがうんだ。ケータイを見ていたのはサ○エさんとキュア○ースの勝敗予想をチェックしていたんだよ」

「はいはい」

解説は再び別の対局へと移っていたが、しばらくすると板橋女流が投了した旨の速報が入った。

ナカムラは解説会の最後まで残るとのことだったが、オレは一足先に帰ることにした。なにせ昼飯を食っていないので、いい加減腹が減った。それに、対局の勝者は大盤解説会場を訪れることになっているため、直接目に触れる場所には少し居づらいという思いもあった。

この時の心配は、あらゆる意味で的はずれだったのだが。

6.

我が家の最寄り駅に降りると、オレは直接ウチには帰らず『Bar 千駄ヶ谷』に向かった。この前店で深酔いしたことをマスターに謝りたいということもあったが、最近なんとなく一人暮らしの家に帰りたくない日が多いのだ。

店に入ると「いらっしゃいませ」とマスターがいつもと変わらぬダンディーな声で迎えてくれた。

いつものカウンター席につくと、

「この間はすみませんでした、迷惑かけちゃったみたいで」

とオレは可能な限り丁寧に頭を下げた。まずは直近の失敗を謝罪しておかねばならない。

「ふふ、タカハシ君があそこまで酔うなんて珍しいよね」

とマスターが相変わらずの余裕の笑みを浮かべていたので、少し安心しながら

「面目ないです・・・」と再度頭を下げた。

後から聞いた話では、あまりの泥酔ぶりを見かねたマスターが、オレを強引にタクシーに放り込んでくれたらしい。オレは知らないカップル客に「彼女なんていなくても生きていけるんだよお！」と力説していたそう。どんだけ迷惑な客なんだ、オレは。

Bar千駄ヶ谷は午後から喫茶店としても営業しているのだが、バーのイメージが強いせいか、日中の客はあまり多くない。この日も午後6時前という中途半端な時間のせいか、オレ以外に客はいなかった。

「ご注文は？」

「スパゲッティ・ミートソースお願いします。それと、ホットコーヒを。ミルク多めで」

「はいよっ」

オレはポケットからケータイを出して漫然と指を動かした。

特に何という理由もないが、ツイッタークライアントを起動して画面を眺める。

『つかさたん勝ったから、今ごろ祝杯あげてるかなタカハシ氏』

『すでに飲んでるだろ＞タカハシ』

『すでに潰れてるだろ＞タカハシ』

「・・・・・・・・」

こいつら、好き勝手言いやがって・・・

あまりに自由奔放につぶやきすぎたせいか、オレのキャラ付けが随分と本人に即したものになっている気がする。ここまで来ると、少し問題かもしれないな。今になってみると本名の『タカハシ』名義でアカウントをつくってしまったことも仇になっていて、リアルでオレのことを知っている人なのかどうか

区別もつきやしない。

「はい、コーヒーおまたせ」

「あ、ども」

オレはケータイを片手にコーヒーを飲みながら、スパゲッティが茹で上がるのを待った。画面を眺めていると、とりとめのない考えが頭に浮かんでは消えた。将棋のこと、大学のこと、部活のこと。しかし、一つとして考えはまとまらず、自分が今やっていること全てが中途半端に思えた。オレはひとまず考えることを中断し、ケータイの画面に向かってツイッターのリプライを返す作業に没頭した。こいつらを相手にしていると、不思議と心が穏やかになる。実際にはそうならない時もあるので多分オレの気のせいだが、今はそういうことにしておく。しょうもないツイートがほとんどだが、それがいいのだ。

やがてスパゲッティ・ミートソースが運ばれてきた。食ってみるとめちやくちやうまかった。

「マスター、これ絶品ですね！こんなコクのあるミートソース初めて食いましたよ！」と思わず叫んだ所、ちょうどジャガイモの皮むきを始めていたマスターに

「そのミートソース、缶詰だよ」とあっさり返された。

ズルッと椅子から滑り落ちるリアクションを取りながら「缶詰ですか・・・」と言うと、「まあ、缶詰のミートソースもおいしいからね」とマスターは苦笑している。

なんだ、缶詰だったのか。言われなきゃ絶対気づかなかったのに。

マスターとくだらない世間話をしながらスパゲッティも食べ終わり、そろそろ帰ろうかと考えていたとき、

カランコロン、と店の扉が開く音がした。

客が来たのか？そろそろ7時だしな。

そう思って、後ろを振り返ったオレは、思わず目を見開いた。

ドクン、と自分の心臓の音が聞こえた。

見築つかさが、そこに立っていた。

7.

つかさたんはドアの前に立って店内を見渡すと、オレの座っているカウンター席まで歩を進めた。

「隣、いいですか？」とつかさたんが尋ねたので、オレは「はい」と答えた。もちろん、「いいえ」と答える選択肢はありえなかった。

つかさたんは対局中と同じいでたちで、膝丈の白いスカートが殊更にまぶしく見えた。

つかさたんが席につくと、テーブルを台拭きで拭いていたマスターがやってきて、

「こちら当店のメニューです。お決まりになりましたらお声掛け下さい」と恭しい仕草でメニュー表を示した。

「あの、メニューの意味がよくわからないんですけど」とつかさたん。

「当店のカクテルは全て将棋にちなんだオリジナルカクテルとなっております。はじめての方ですと、こちらや、このあたりのものがおすすめです。ソフトドリンクはこちらになります」とマスターが説明を加えた。

「え〜と、じゃあこの千駄ヶ谷の受け師でお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さいませ」

カウンターの隣席に座る女性を見つめながら、オレは何と声をかけていいかわからないでいた。つかさたんとの一連の出来事に対しては、すでに自分の中で一応の決着をつけていたし、再び顔を合わせることは想定していなかったのである。

見たところ初めてこの店に来たようだし、若者がカジュアルに利用するような雰囲気のお店でもないから、もし偶然だとすればよほどの確率ではないだろうか。

「見築先生、今日はおめでとうございます」

と口を開いてから、オレは、少し後悔した。自分で言っていて随分間の抜けたセリフに思えたからだ。

つかさたんは小さな声で「どうも」と返した。そして再び沈黙が訪れた。

注文したカクテルが運ばれてくる頃になってようやく、つかさたんは口を開いた。

「この間は、すみませんでした」

「・・・・・・・・」

「あんなひどい言い方をすべきではありませんでした」

「・・・・・・・・」

つかさたんの言葉は、オレにとって少し意外なものだった。一度フツた男にわざわざそんなことを伝えるのは、なんというか、あまり一般的でない気がしたのだ。

三度目の沈黙が訪れそうな気配を感じて、オレはあえて違う話題を振ってみた。

「オレがここにいることは知っていたんですか？」

「タカハシさん、ツイッターでつぶやいてたでしょ」

「！？」

一瞬、呼吸が止まった。

「タカハシさんのツイッター、業界では有名なんですよ。熱烈なファンがいるって。私も、フォローはしてなかったけど聞いたことはありましたし。将棋祭りのあと、スタッフの方が教えてくれたんですよ。タカハシさんのアカウント」

「オレのツイッター、見たんですか？」

狼狽を隠せないオレ。

「はい。正確に言うと、ついさきほども読んでいましたが」

「・・・・・・・・マジ、で？」

「はい、マジです」

頭がクラッとした。つぶやきを・・・見られている？しかも、かなり頻繁に？

「すまない、ちょっと待ってくれ。マスター、お冷を一杯お願いします」

少し状況を整理しよう。先々週の将棋祭りの後、オレのツイッターアカウントの存在がイベントスタッフによってつかさたんに伝えられた。その後、彼女はオレのつぶやきを何度かチェックしているようだ。オレ、なんかマズイこと書いたっけ？うん、書いてるよ。心当たりありまくりだよ。むしろすべての発言がレッドゾーンだよ。問題は、どのタイミングでツイートを読まれたか、だが・・・

「見築先生、オレのつぶやき、どのくらいチェックされました？」

恐る恐る聞いてみると

「ほとんど毎日ですけど」とサラッと答えるつかさたん。

「（ふおおおおおおおうわああああああああ）」

混乱を極めるオレ。

「はい、お冷おまたせ」

「あ、ども」

まずは水飲んで落ち着こう。

「タカハシさん、この間の出来事以来、『早くオジサンになりたい』とか『爆発するオリオン座を眺めながら余生を送りたい』とかつぶやいてましたよね。さすがに私、悪い事したかなと思ったんです」

そんなことつぶやいたっけ？オレ・・・

「私、別にタカハシさんのこと嫌いだと思ってたわけじゃなくて、どういう人なのか知らなかったから、だから、あの時は・・・」

「・・・・・・・・」

「でも、これだけは言っときますけど、ツイッターで『つかさたんの触覚〇〇にゃんみたい』とかつぶやくの、やめてもらえませんか？意味分からないですし、ちょっと怖いので」

ゲホッ

思わず飲んでた水を吹き出しそうになる

「次からは、控えます・・・」

もはや言い訳できる段階にないことを悟り、オレは素直に謝罪の意を示すことにした。今まで思い付くままにつぶやき、自由に振舞いすぎたことを、オレは素直に詫びた。

「追加の注文はよろしいですか？」とマスターがつかさたんに声をかけた。この人の客に話しかける間はいつも絶妙で、タイミングを外すことがない。必要以上にしゃべりすぎないし、客を飽きさせることもない。

「それじゃあ、直感精読をお願いします」メニューを見ながらつかさたんが注文した。

「少々お待ちください」

と言うと、マスターはシェーカーに液体を注ぎ始める。

「つかぬことをお伺いしますが、見築つかさ先生でいらっしゃいますか？」

「はい、そうです」と答えるつかさたんに、

「プロの棋士の先生にお越しいただけるとは、これ以上ない喜びです」

とマスターが深々と頭を下げた。

「いえいえ、そんな」と恐縮するつかさたん。

「今日は対局がおありだったのですか？」とマスター。

「はい。女流棋聖戦の一次予選だったんですけど」

「ほう」

「今日はなんとか勝てました」

「そうですか。それはよかった」

と言い、マスターはにっこりと微笑んだ。いかにもナイスミドルといった風な、感じのいい笑い方だ。

「将棋、好きなんですか」とつかさたん。

「ええ、将棋は昔から好きなんですよ・・・っと」

答えながらマスターはシェーカーにふたをすると、シャカシャカと振り始めた。小気味良く、洗練された仕草だ。

「どうも指す方は上達しないのですけどね。お客さんと将棋の話をするのは好きなんですよ」

「へえ。将棋好きな方が多いんですか？」と感心した表情をみせるつかさたん。

「ええ。この店は開店当初から、愛棋家の方によく集まっていたきましてね。昔は将棋大会なんかもよくやったものです」

へえー。ここで将棋大会をやったなんてオレも全然知らなかった。このオシャレなバーで将棋大会が開かれるなんて今ではとても想像できないが、もう随分長くやってるみたいだし、店の雰囲気も昔とは変わったのかもしれない。

「ですが、当店もプロの先生がいらっしゃることは滅多にありません。ですから、見築先生は特別なお客様です」

そう言うとマスターは再び微笑んだ。スマートな笑い方だ。

つかさたんの方を見ると、「そんなことないですよお～」と言いながらも、まんざらでもなさそうな様子である。

このオヤジ、まさかつかさたんのこと狙ってやがるんじゃないだろうな・・・、と余計なことを考えながらも、つかさたんの楽しげな様子にオレはほっとしていた。

その後、話題はつかさたんの対局へと移った。

「でも、最近は大事な試合で勝てないことも多くて」とつかさたん。

「ほう、そうなのですか？」とマスター。

「はい。だから最近是对局の前の日になると、なんでプロになったんだろうって、思うんです」

「見築先生ほどの方でも不安になったりするものなのですか」

「それはもう、しょっちゅうですよ。負けが続くと特に」

「ふむ」と小さく合の手を入れるマスター。

「プロになってから分かったんですけど、研究の深さとかが全然違うんですよ。それに全然追いつけないっていうか。でも、今は自分ができることを一つずつをやるしかないんです」

と勝負の裏側を語るつかさたんに、マスターはうんうんと頷いている。

その後も、（主にマスターのおかげで）楽しい会話が続いた。この時間がずっと続けばいいのにと心から思った。できることなら、今日の会話も、目に映る光景も、全てを記憶に残しておきたい。

やがて二人連れの客が来店し、マスターが注文を取りにカウンターを離れた。

ややあって、つかさたんが「あ、もうこんな時間」と言い、「時間も遅いし今日はそろそろ帰りましょうか」ということになった。

支払いを済ませ、帰ろうとするオレとつかさたんに、マスターは「またのお越しをお待ちしております」と深々と頭を下げ、「どうぞお気をつけてお帰りください」と言ってニツコリと笑った。

外に出るともうすっかり日は沈んでいた。

「見築先生、駅の方で大丈夫ですか？」

とオレは歩き出したが、

「あれ？ちょっと待ってください」

つかさたんはゴソゴソとバッグの中を何か探している。

「あれ？あれ？おかしいな」

見るからに焦っているけど、まさか鍵を無くしたとかじゃないだろうな。

「私、鍵なくしちゃったかも」

コケッ

古典的な動作でコケるオレ。

「こんな時間じゃたぶん不動産屋も閉まってますよ」と言うと、

「え、そうなんですか？」と不安そうな表情をみせるつかさたん。

「ええ、たぶん」

「一応大家さんに電話かけてみますから、ちょっと待っててください」

そう言うにつかさたんはケータイをポケットから取り出し、電話をかけ始めた。

と同時に、オレはあることに気づいた。

「そのストラップに付いてるの、カギじゃないんですか？」

「？ストラップ？」

「それですよ、それ」と指さすと、

「あ、昨日ここに付けたの忘れてました」とつかさたん。

「そんな大事なことを忘れないでください！！」と思わず突っ込むオレ。

つかさたん、ひょっとして本当は天然さんなのだろうか・・・？

「ケータイにカギとか付けちゃ危ないですよ。ケータイなくしたらどうするんですか・・・」

「あはは・・・」と苦笑するつかさたん。

「私、今年の春から一人暮らししてるんです。だからこういうの、まだ慣れてなくて」

「今年の春ってつい最近じゃないですか。一人暮らし、どうですか？」

「そうですね、実家に比べると不便ですけど、一人暮らしもこれはこれでいいかなって思います。開放感があって」

「□□□□□の薄い本も集めちゃったりして」とオレが言うと

「むっ」

とつかさたんは頬をふくらませた。

「もう遅いし、駅まで送っていきますよ」

オレが提案すると、

「いいですよ、実は私の家、ここから近いんです」

やんわり断られた。

「まあまあ、そう言わず」

「いいって言ってるでしょ、もう」

「予選突破のお祝いにケーキでも買って行きますか」

と悪ノリするオレ。

「ケーキって、それどこで食べるんですか」

困惑するつかさたん。

「そんなの買ってから考えればいいですよ」

言ってオレは歩き出す。

「もう、タカハシさんの言ってること、どこまでが冗談なのか分からないです」

慌ててついてくる仕草がかわいい。

大通りまでの道をしばらく歩いていると、

「星、見えないですね」

ふいにつかさたんが言った。

空を見上げると、なるほど、厚い雲に覆われて星はひとつも見えなかった。

湿った灰色の空を眺めながら、オレは汗を拭った。

どうしたの？ 辻村君

1.作者による「辻村創造」

清水らくは

今回は『七割未満』の主人公であり、『五割一分』にも登場する辻村君の素顔に迫ろうと思います。

辻村君は最初、『五割一分』という小説に出てきました。この小説、主人公は冴えないプロ棋士、三東四段。そしてそこに天才少女、金本月子さんが転がり込んでくるという話でした。で、この二人とってもおとなしいんです。目立とうとしないし、静か。そこで対照的なキャラを創ろうとしたら、辻村君が出てきたんですね。若くて自信家で、それでいてどこか悲しげ。彼の方が月子さんに憧れる、それが物語のスパイスになればと思いました。

ただ、『五割一分』では彼のことを書ききれなかったのが、彼を主人公にした『七割未満』という話の設定を思いつきました。天才だけど一番じゃない、オシャレにこだわるけどなんか変、いい加減そうで実はちゃんとしてる。そんな男の子を書くのはとても楽しいです(笑)

そんな辻村君には皆川さんという姉弟子がありますが、彼女は『五割一分』を最初に書いたときにはいなかったキャラなんです。某賞に応募した時に貰ったコメントをもとに、物語を膨らまそうとした時にちょっとだけ出てきたキャラでした。それがまさか表紙にまでなるなんて、作者としてもびっくりです。

辻村君にはモデルがいるんですが、設定自体はかなりオリジナルが多いです。高校をさぼっているのは「月子さんができなかったことを自ら放棄する」という余裕の表れみたいなものですね。両親との関係にしても、彼はみずから断っているところがあります。川崎君というライバルがいるんですが、彼は『レイピア・ペンダント』という作品に出てきた、天才型のプロ棋士です。辻村君より一歳年上なんですが、将棋以外の点ではどこか幼くて、偏執的で、でも純粹。まだまだ彼の魅力は引き出せていないので、今後辻村君との絡みをもっと書いていきたいです。

実は作者も辻村君の容姿はよくわかっていなくて、「背は高くなくて、髪が多くて、目は細め」ぐらいのイメージしかありません。基本、男キャラの容姿は書いていない気がします(笑)ですから彼については、これから「創造」していく段階ですね。

2.敗戦後の形勢

第25回 辻村充四段 「優勝を知らない10代棋士の嫉妬」

上石三郎

早熟であることは天才であることを意味しない。10代でプロ棋士になるものが、皆名人になるわけではないことは当然のことである。しかし。中学生棋士たちが皆タイトルを獲ってきたことを考えると、若くしてプロになった者はやはり特別な気もする。私たちは無邪気に10代棋士たちに同様の活躍を期待してしまうのだが、爆発的な輝きは最近見ることはできない。それどころか、最近の10代棋士は順位戦で負け越しさえしてしまう。このまま、「普通のプロ」で終わってしまうのではないか、と思うと少しさびしい。

三段リーグは今でも過酷であり、そこを抜けることは厳しい。しかしそれゆえに、リーグで悔しい想いを経験した方がプロになってから通用するたくましが身についているのではないかとすら思えてくる。リーグをさっと抜けてしまった10代棋士は、先輩たちに対抗するだけの芯からの強さを持ち合わせぬままに戦いの場に出てしまっているのではないか。

若者が様々な壁を才能だけで食い破っていく、そんな姿を見たい。ファンは無責任にもそのようなことを期待してしまうのである。

そんな勝手な期待を実現してくれるかもしれない若者が、二人現れた。一人は川崎。デビュー以来何人もの強豪を倒し、一躍その名を広めた。残念ながらタイトル挑戦などには至っていないが、いつかは大舞台に行くだろうという声が多い。

そしてもう一人、期待の新人がいる。辻村である。川崎より一歳若い彼は、川崎より先にプロになった。七割近い勝率を残し、圧勝する将棋も多くみられる。高校生棋士であり、最近はおしゃれにも凝っているようである。しかし、彼に関してはあまり先輩方の話題に上るということを聞かない。確かに強いのだが、超一流になるような圧倒的な何かが感じられないためであろう。確かに、将棋に関してはあまり印象がない。

辻村四段自体もあまり多くを語るタイプではない。ただ、内に秘めた強い闘志は、感じられる気がしていた。そしてそんな彼が、若手奨励会員たちと研究会を始めた、との噂を聞いた。これまで研究会をしていなかったことも驚きだが、彼が後輩の面倒を見ているというのも予想外の出来事だった。孤独を愛し寡黙に研究する、そんなイメージを抱いていた。

辻村充とはどんな棋士なのか。実態に迫ってみたいと思った。

優勝経験のない天才

辻村は、確かに早熟だった。6歳で将棋を覚え、小学二年生の時に道場初段になった。その間特に苦労した覚えはないと言う。ただ、家族や友人が誰も将棋を指さないため、実戦数が少なかったかもしれない、と語っている。弱い時から強い人とばかり指していたため、子どもらしく将棋を楽しむという期間がなかった。そして常に上を目指していた辻村にとって、大きな出来事が訪れる。KKLY将棋大会である。彼は二年生の時、関東大会において、低学年の部決勝戦まで勝ち進む。当時三段になっていた辻村にとって、優勝は当たり前のことに思われた。しかし、そこに立ちはだかったのが川崎であった。公開対局の場で、辻村は完敗する。当時を振り返って彼は「泣くことすらできなかった。何が起こったのかわからなかった」と語ってくれた。

その後様々な小学生大会に出場した辻村だが、優勝することはできなかった。その多くは、川崎によってはばまれた。辻村にとって当然妥当川崎が目標となったのだが、その川崎は先に奨励会に入る。そして辻村は、川崎のいない大会には出なかった。一年後、「当然のように」辻村も奨励会に入った。

辻村はこのようにして、優勝経験のないままにプロの道を志すことになった。実力はあったものの、常に川崎に一步遅れていたことは隠しようのない事実である。

一歳年下とはいえ、同年代にまったく勝てない相手がいることは屈辱であったに違いない。実際辻村はことあるごとに「川崎さんに勝ちたい」と言っていたという。しかしそんな辻村は、三段リーグで川崎に追いつき、もう一人の天才、懸よりも早く四段に昇段した。本人も想定外だったという。「自分はまだまだだと思っていた。ただ、リーグ戦は自分に合っていたんだと思います」辻村自身はそう分析している。トーナメントで一度も優勝できなかった男が、リーグ戦で結果を残しプロになった。勝負の世界は本当に不思議なものである。

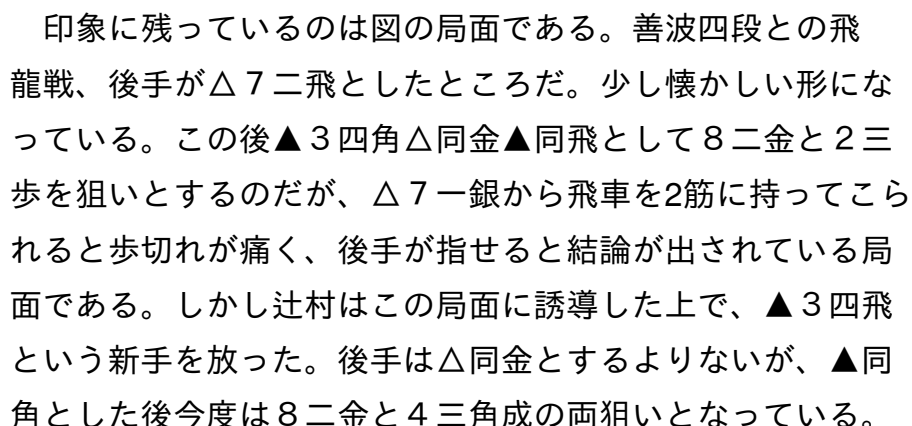
こうして高校生棋士・辻村四段が誕生した。天才候補の10代棋士に、注目が集まったのである。

理念の研究

辻村はコンスタントに勝ち続け、勝率は七割を超えた。しかしトーナメントではやはり勝ち進むことができず、新人戦でもベスト8に終わった。

最近の若手はすべからく研究派で序盤に隙がない。辻村もその例にもれなかったが、研究会には一切所属していなかった。制服姿のまま控室に来ている姿は何度も見たが、ひたすらひとりで勉強している、といった感じだった。たまに姉弟子である皆川女流1級と話しているのは見たが

そんな辻村の将棋は、どこか孤独さを感じさせる。一手一手細かく研究するというよりは、見捨てられた変化に光を当て、自分なりに意味を与えてやるような、そんな指し手が多い。



「最近流行している形は、軽すぎて好きじゃないんですよ」
少し笑みを浮かべながら彼は言った。そしてこう付け加えた。
「誰にでも好手になる手というよりは、自分にとって最善の手を研究している感じなんです。手というよりは理念かな。自分の性格とか、まあもっと言えば終盤力とかに合わせた研究じゃないと意味がないんで」

「辻村先生は、悪手について駄目だとは言わないんです。悪手を指すのがわかっていてなんで序盤に力を入れないんだ、そう指摘してくれます。今武器になっている終盤力は、上に行ったら皆持っていて当たり前の防具にしかない。もっと他に武器を見つけないとプロにはなれないって」

辻村は、手ではなく理念を研究する。彼が超一流になれるかどうかは、この点が成功するかどうかにかかっているだろう。

「常に嫉妬している」

先日辻村は、プロになって初めて川崎と対局した。プロになる順番でこそ逆転したものの、奨励会でもほとんど勝てていなかった。辻村も「ここで一発入れとかなないと、将来に関わると思った」と考えていた。しかし、勝負は完敗だった。

「常に嫉妬していますよ。川崎さんはずっと二歩ぐらい前を走っている。いつでもタイトルを獲れるだけの力を持っていると思うんですよ。でも僕はまだ本当に強い人には勝てない。せめて勝てる将棋は落としちゃいけない、七割は絶対維持しなきゃいけないと思っています」

嫉妬を告白し、勝率を目標とする。これまでそんな若手がいただろうか。彼はまだ高校生である。しかし川崎というライバルがいることにより、時間の足りなささえ実感しているようである。

残酷なようだが、川崎に負け続けることにより辻村という棋士は成長を続けるだろう。川崎の影に隠れながらも、理念という武器を育て続ければ、きっと彼は超一流の天才になれる。

そういえば、大事な質問を忘れていた。最近辻村は急におしゃれに凝り始めたように見える。スーツで対局する事も増え、髪型もどんどん目立つものになってきた。こちらに心境の変化はあったのだろうか。

「いや、それは……内緒でお願いできますか」

少しもじもじと答える様子は、間違いなく10代男子の姿だった。私はいろいろな意味で、温かい気持ちにさせられた。

3.どうしたの？辻村君 ～ツクモさん、五割一分以上七割未満な番外編です！～

贅楽夢

1.

何やってるんだ、あいつ？……というのが、その日彼を見たときの偽らざる第一印象だったのは間違いない。

今年四段に昇段し、つい先月末には新人王戦で優勝を飾るなど将棋の成績だけに限ればそれなりに順調な日々を送っていた僕は、そろそろ冬の訪れも間近となった11月のある日の午後雑誌のインタビュー記事の取材に応じるため将棋会館を訪れていた。そして指定された部屋へと向かう途中、通路の向こう側を歩いていく彼の姿を見かけたのだった。

視界の中を颯爽と横切って行く彼は、最近、高校生で四段になったばかりの、将棋界の期待の若手棋士である。彼とは奨励会に在籍していた時から何度か対局したこともあるし、そもそも今年の奨励会卒業同期でもあるので彼と僕をライバルとしてとらえている人も周囲にはいる。未だにいる。僕が中学生棋士になりそこねた20歳間近の「元・天才」で彼が高校生プロ棋士となった「現・天才」であったとしても、だ。

しかし将棋の方ばかりでライバル視されているけれども、その他の部分、具体的にいうとビジュアルについては全く勝負にならない。将棋で言うと、一方の玉将に2手スキが掛かっているとしたらもう一方は深く穴熊に囲われていて王手も掛けられないような、逆転の目は0.2%もないといった状況だ。勿論2手スキが掛かっているのは僕の方だった。

実際、彼は格好良いのだ。やや癖のある前髪、軽く刈り上げられた襟足、そして意志の強そうな両目の目線。礼儀正しい身のこなし。高校のブレザーの制服を着ていることも多いが、稀にスーツ姿に身を包んでいることもある。クラスの中でも教師の期待を一身に集めています的な空気というか、あらゆる業種で期待のルーキーと言われる種類の人間が共通して持っている雰囲気というか。そういったものをそこはかとなく醸し出しているような、そんな若者だった。

その、彼は。

今日もクリーニングしたてのようなさっぱりとしたブレザーの制服に身を包み、軽やかな風を周囲に撒き散らしながら、しかし若干足取りが重そうな感じで会館の中を歩いていた。時折他の棋士たちに声をかけられては朗らかに応対している。その姿もまた清々しい。

その様子を見ながら僕は思う。「ああ、また出たのか……」と。

そう思ったのには勿論理由がある。周囲の誰もが、彼を見た時に当然持つはずの疑問を口にしていなかったからだ。その、あまりにも異様な姿を目の前にしても。つまりそれは僕しか気づいていない、僕にしか見えていないということである。……そして僕は「見える者」だ。だから言える。他の誰にも見えないその光景を目の当たりにして。他の誰も言わない言葉を発することが出来る。「どうしたの？辻村君」という問いを。

なぜなら。

将棋会館の中で爽やかに、そしてアトラクティブに立ち振る舞っている彼——辻村充四段の右足首には……子犬とも子猫ともつかない暗褐色の一種異様な小動物が、巻きついていたのでから。

2.

「それは『スネコスリ』だろうね」

というのが、ここ——都内某所にある謎の禅寺・長考寺の住職、田沼泥鰯の見解だった。

スネコスリ。それは岡山県に伝わる妖怪で、多くは犬のような形をしており雨の降る晩に人の足の間をこすって通るという怪異らしい。同種のものに「アシマガリ」というのもいて、こちらは道を歩いているときに綿のようなものが絡みついて歩くのを邪魔するのだという。なおこの場合の「まがる」は「邪魔になる」という意味で「アシマガリ」とは文字通り「足の（＝歩く）邪魔をする」という意味だとか。

「危険な妖怪じゃない。2ヶ月前に起こったあの事件のようなことにはならないさ」

まあ多分だけど、といい加減なことを言いながら住職は僕にお茶をすすめてくれた。いつもの和室で、いつもの急須で淹れられたいつも変わらぬ味のお茶を、いつものように頂戴する。

今から1年と数ヶ月前。ふとしたはずみでこの住職と知己を得た僕は、その後正体不明の妖怪に取り憑かれ、左腕を失い、さらに命を落としかけたところをこの住職によって一旦は救われた。

ところが。

さらに今年の秋、性懲りというものを知らない僕は多数の奨励会員を巻き込むことになった大事件に遭遇して、というか自ら首を突っ込んで、わけの判らない化物に行き逢って、そしてまた、この寺の住職・田沼泥鰯に助けられたのだった。恩人である。確かに命の恩人ではあった。だがしかし、そもそも住職に出会っていなければ、僕の人生はこんなことになっていないような気もするのだが、それでも恩人である。住職との邂逅をきっかけに四段になれたという一面もあるのだから、このことで恨み言は言わないことにしている。そう自分で決めている。

泣き寝入りとも言う。

「しかし君も、次から次に化物をよく見つけてくるよね……」

「いや別に、見つけたくて見つけてるわけじゃないんですけど」

「まあ『見える』ようになってしまったんだからしょうがないけどね。そのスネコスリ、憑かれてる本人も気付いてないんでしょ？」

「そんな感じでしたね。一応、足どうかしたの？って聞いてみましたが思いっきり『は？』って言われました」

「君の場合は何を話しかけても『は？』ってあしらわれてそうだよなあ……」

ほっとけ。大体合ってるけど、そこはほっとけ。

それはともかく。

禅僧・田沼泥鰯は一度ならず二度までも僕を妖怪変化から救ってくれたわけだけれど、本人曰く「別に僕は妖怪退治のエキスパートってわけじゃないし、君を助けたのもたまたまなんだからね。勘違いしないでよねっ……そんなことより坐禅組んでみない？」とのことである。ツンデレならぬツンゼンであった。

結局、住職から得られるスネコスリについての情報は「足に絡みつく」ことだけで。これについてはそれ以上でも以下でもなく、スネコスリに喰い殺されたという怪談巷説があるわけでもないらしく。だから今回については、住職がああ妖怪封じのリーサルウェポン『仏頂尊勝陀羅尼經』を唱えることは、どうやらなさそうだった。要するに今回は住職の出る幕ではない、ということか。

じゃあ、もう辻村君のことはほっといてもいいんだろうか？これからまた、2ヶ月前のような騒動になったりは……しないのだろうか？危険な妖怪じゃない、と住職は言うけれど。

かつて僕は、危険なんて全くありそうもなかった将棋の駒に関わったせいで、他の誰でもないこの住職にその駒に引き合わされたせいで……左腕を失うことになったのだけれど。

……この坊主、どこまで信用していいのだろうか？

いずれにせよ、これ以上、住職から何かを聞き出すことは出来そうもない。ということで。

ツンゼン萌え属性のない僕は、坐禅の誘いは自分なりに丁重に断って、そして。

長考寺を後にしたのだった。

3.

ということで次の日、ここは僕の自宅である。やはりこの世で我が家が一番落ち付く。僕はひとしきり「月萌の将棋盤」で棋譜並べをしてから、そのまま部屋で軽く食事を取って、そしていつものようにtwitterにアクセスする。住職が知らないのなら、あるいは教えてくれないのであれば、次はこのお方。相互フォローしている者同士だけが可能なお手軽コミュニケーションツール「DM」を送る先は、「妖怪はみんなツンデレだ」と声高らかに断言する妖怪物好きの自宅警備botこと「ぜいらむタソ (@Zeirams)」だった。

「そもそも妖怪というのはですね、概ね『かまってちゃん』なんですよ？」

相変わらず、妖怪に対して楽しい解釈をしてくれるぜいらむたん。

「相手をして欲しいだけ、ってことですか？」

「そう。幽霊だと自分の存在に気づいてほしいだけとか、自分を殺した犯人の正体を伝えたいだけとか。油すましはそのまんま『今でもいるぞー』って大声で叫ぶし、河童は美少女に相手をして欲しいあまり、どういうわけか排泄中の美少女のお尻を撫でたりします。その行動原理はいずれも単純に『私を見て』ってことなんじゃないかと、わたしは思いますね」

「……河童は美少女のお尻を撫でるんですか？」

「……いや……そこは本筋とは全然関係ないんですけど……まあそうです。美少女の可愛いお尻

を撫でまくりです」

「なるほど……。生まれ変わったら河童になりたい」

「懸さん、心の声がダダ漏れですよ。ていうかそんな変態ツイートをDMしないでください」

ぜいらむタソ曰く、スネコスリに足に絡みつかれた場合、しばらくの間相手をしてあげれば満足して消えるという事例もあるらしい。とは言え、辻村君にはスネコスリの姿は見えていないのだから相手のしょうがない。満足させてあげるべき相手が見えない。ならばどうする？

スネコスリの発生に意味があるとするならば。そしてそれが辻村君の足に絡みついているということとは……。

「誰か、その彼に構って欲しいと思っている人が、いるんじゃないですか？その思いがスネコスリを発生させているのかもしれない。あるいはその逆に……」

と、ここからぜいらむタソ得意の妖怪ツイート大連投が始まったのであるが、今回はあくまで番外編なのでそこは盛大に省略させていただくことにしよう。

ぶっちゃけ、もうぜいらむタソの妖怪語りなんかより、そして辻村君の足首にまとり付くスネコスリなんかより、河童の話の方が気になってしょうがなくなっているのだが、ぜいらむタソの言うとおり、確かにそれは本筋ではなかった。将棋指したるもの、必要もないのに本筋を外した手を読むべきではない。

……いや待てよ？そういう思い込みこそが危険なのではないだろうか？こんな時、埴生名人だったら異筋の手こそを深く掘り下げるのではないか？そう、本筋だけにとらわれていては進歩はない。新しい鉱脈を探り出し、新定跡を開発していくためにも、ここはひとつ、辻村君を見捨てて、美少女のお尻を撫で回す河童の生態研究を……。

「美少女フィギュアのお尻を撫で回しながら何をブツブツ呟いてるんですか、懸さん……」

我にかえって顔をあげると。

そこにいたのは……青い顔をしてワナワナと声を震わせながら、可哀想な子を見る視線を僕に向けている巫女装束の幽霊少女、月萌だった。

4.

月萌と僕の関係について過不足なく説明するのはとても難しい。恨みがないわけではなく、感謝している面もなくはなく、楽しいこともあれば哀しいこともあった。腐れ縁という奴だ。

事情を全く知らない読者は、とりあえず「駒.zone Vol3」を読んで欲しい（ステマ）。

月萌は江戸時代に実在した将棋の家元・大橋分家に関わる幽霊である、らしい。彼女は以前僕の左腕を奪い、脳天をかち割ろうとして田沼泥鰯に封じられた。それが今から約1年前。ところが今年の僕の誕生日に、突然に、唐突に、あっさりと、あるいは厚かましく、再び僕の前に姿を現して、そして――さる2ヶ月前の事件の時に、僕の命を救ってくれたのだった。幽霊だけにとってもヒマらしく、呼んでもいないのに僕の部屋によく遊びにくる。将棋の勉強の邪魔になるので迷惑なことこの上ない。さっさと成仏すればいいのに。

とりあえず僕は、美少女フィギュアのお尻を撫で回していた本当の理由——つまり、将棋界のホープである辻村四段を妖怪の魔の手から救わんと対策を練っていたのだ、ということを月萌に話してあげたのだが、彼女はアホの子だったので、辻村君に取り憑いたスネコスリの怪と美少女フィギュアのお尻との関連性がイマイチ理解できていないようだった。わかってもらえなくて残念だ。遺憾の意を表したい。

「しかし懸さん、かまってちゃんということなら、わたし心当たりがありますよ？月子と皆川さんでしょう？」

月子さんだけ呼び捨てだった。それはともかく、その二人の名前であれば僕にも思い浮かばないわけではない。というより、それは将棋界では割と有名な話なのである。辻村君が月子さんを気にかけていて、一方で皆川さんが辻村君に向けて目からラブラブビームを発射しまくっているという話は誰でも知っている。ダダ漏れ乙、だった。

「そもそも、辻村さんってモテますしね。女流棋士にも女性ファンにも」

そうなのだ。ツイッターで「辻村君、今日もセンスのいい素敵なスーツですね」とか「つっじーのブレザーはあはあはあはあ...」とか「充のぷりぷり耳たぶ、ぐへへ」などといった女性ファンの眩しさを、少なくとも僕のTL上ではよく見かけるので女性ファンが多いのはまず間違いない。女流棋士が実名で「つっじーハハハ」と眩したりは、さすがにしていないけれど。当たり前か。いずれにせよ僕が見る限り、辻村君がモテモテなのは明々白々だった。そうそう、そう言えば僕の所属する研究会の先輩・千場さんは、月子さんを自分の研究会に誘い、あっさりふられたショックで直後の奨励会の対局を落とし、そのために1勝差で四段昇段を逃したことがある、という噂を聞いたことがある。うん、きっと、そうやって人は大人になっていくのだろうな。いや知らんけど。

金本月子という奨励会員が、辻村君の研究会に参加したときの経緯は、これも将棋界ではかなり有名な話だ。棋士や奨励会員が研究会に参加すること自体は何も珍しいことではないのだが、この場合、月子さんが「千場さんからの誘いは断ったのに辻村君はOKだった」ことが有名な話なのだった。

「そもそも、千場さんの誘いを断った理由というのがアレですしね」

「お前の言うアレというのが何のことやら僕には分からないけど、冷静に考えて高校生で四段になった辻村君の方がどう考えても将来性があるし、というかそもそも辻村君の方が遥かに強い将棋なんだ。月子さんとしてはどうせ参加するならよりレベルの高い方がいいと考えたとしても、別に不思議なことじゃないよ」

「何言ってるんですか、将棋だけなら千場研究会には懸さんが参加してるんだから、十分レベル高いじゃないですか」

.....さらっと褒められたような気がしてちょっと嬉しいと思ってしまった僕だった。そう、千場研究会は特にその序盤研究の精度において、将棋界ではかなり評価が高いのだ。どちらかと言えば序盤の指し方に難のある月子さんにとって、辻村君の誘いに乗るよりは、千場研究会に参加した方が、はるかにメリットがあるはずだった。にも関わらず、だ。

「つまり月子は研究会を選択するにあたってレベルの高低など問題にしていなかったということ

すよ！」

「何っ！？ではどういう理由で選んだのだろう？ああっ、僕には全く見当がつかないぜ！」

「判りませんか！？」

「判りません！」

「私、その理由を知ってますけど知りたいですかっ！？」

「知りたいです！」

「辻村さんがイケメンだからです！」

至極もったもな理由だった。辻村なんか大爆発すればいいのに。

「大体ですね……」

ちっちっち……と、月萌は立てた人差し指を左右に振ると、その指を僕にめがけてびしっと伸ばし、そして残酷な天使のように宣告した。

「千場さんや懸さんには、清潔感というものが全くと言っていいほどありません！」

「ぐっ……ぼ、僕だって3日に1回はちゃんとお風呂に入ってるもん！」

「毎日入りなさい！あと同じ服を何日も着続けるのをやめなさい！それから、えーと、そうそう、懸さんは臭いです！」

さらりとひどいことを言う巫女だった。大体、同じ服を着続けるというのなら、月萌もずっと巫女装束ではないか。……巫女だから当たり前か。何着か持っていて一応毎日着替えてるんだろうな。

「というかですね、下に着ている水着を毎日着替えています」

「スク水を何着も！？」

「いえ、競泳用水着も何着かありますが」

「それは素晴らしい」

「最近のスク水はスパッツタイプも多くて、いまいち残念な感じが拭えませんか？」

「あれはあれでいいところ(?)もあるんだけどな」

「まあ、なんだかんだでまるぺけ(@maruX)さんにいただいた水着も含めると、現在50着ほどの巫女装束用アンダーウェア水着があるわけですよ」

「いつの間にまるぺけさんから水着をもらったんだ、お前……」

「その辺りの事情は、今後のストーリーの根幹に関わってきますし、今回はあくまで番外編なので、今はまだ詳しくは話せませんが……」

「え？まるぺけさん、本編のストーリーにも登場するの？」

「いえ、本編ではわたしの全パターン水着イラストを描いてもらいます」

「どこがストーリーの根幹だ！」

「ツクモさんシリーズの八割一分は、まるぺけさんのイラストで成立しているのです」

「それを言ったらおしまいだ！」

「ちなみにビキニは持ってませんし着る気もありません。ビキニなんて邪道です。エライ人にはそれが判らんのです！」

「さすが月萌、判ってるな。お前とはうまい酒が飲めそうだ……」

いや飲みませんけどね、未成年だから。飲んじゃいけない。

「それはそうですね、懸さんは部屋でカップ麺ばかり食べてるから体中にトンコツスープの臭いがしみついちゃうんですよ？」

最近のカップ麺はスープが濃厚で美味ではあるが、臭いもきつくなるのが玉にキズだった。というか食後にカップを洗わずにいつまでも放置しておくのがいけないのかもしれない。

「一日中窓を締め切ってるし。ちゃんと換気しなきゃダメですよ」

そう言えば、部屋の窓を開けるのはいつの間にか月萌の役割になっていた。僕が窓を閉め切るようになったきっかけは、そもそもこの幽霊少女がいつ覗きにくるか判らない、という恐怖心からなのだが。まあ、幽霊相手に窓を閉めても意味はないんだけど。それにしても……つくづく、月萌と住職に関しては原因と結果が倒錯している。「あなたたちのせい」と「あなたたちのおかげ」が混在している。ダメされているような気がするし、し続けている。ぜいらむタソは「住職には気をつけた方がいい」と言っていたけれど。

それにしても、僕、そんなに臭いのかな？そもそも、自分の体臭というのは自分では判りにくいものだったりするのだ。月萌の言うとおりに体中からトンコツスープの臭いが発散しているのだとしたら、それは由々しき事態である。弥内さんが僕を避けているのは、トンコツスープの臭いのせいだったのかもしれない。もしかすると僕の部屋には、さながらヒッグス粒子のようにトンコツ粒子が充満しているのかもしれないぞ！いや、ヒッグス粒子が何かよく判ってませんけど。

「充満してますね。しかも懸さんの部屋中に大将棋の駒の如くみっしりと並べられている美少女フィギュアにもトンコツスープの臭いがたっぷりとしみ込んでいますよ！」

「うわぁ！大変だ！ファブリーズしないと！」

こうして新たに発見されたトンコツ粒子は僕の絶望感に質量を与え、そして僕を部屋中のフィギュアの消臭作業へと奔走させ、そうこうするうちにいつの間にか辻村君のスネコスリの件はどうでもよくなっていたのだった。最初からどうでもよかった気がするけど。

ふとPCの画面見ると、ぜいらむタソからの妖怪DM連投がまだ続いていて、それからしばらくの間、月萌と僕がわぁわぁとおバカな会話をしていると、やがてそのDMも終わりを告げた。

ちなみに、ぜいらむたんの最後のDMにはこんなことが書いてあった。

「……だから、スネコスリなんてほっとけばいいんですよ。それは、誰かが祓うのではなく、辻村さん自身が自分で解決しなくちゃいけないことなんですから」

5.

それから数日後。少し肌寒い秋晴れの日。僕は月萌を連れて将棋会館へ向かった。辻村四段の雑誌企画の特別対局があると聞いたので、彼の様子を見てみることにしたのだった。

危険のない妖怪とはいえ、僕にはそれが「視えている」のだから気にしないわけにはいかない。昨日、ぜいらむタソのDMを後で読み返してみたのだが、かいつまんで言うと、要するに辻村

君は「振り向いて欲しい気になる人」がいて、一方で「自分を気にかけている人」がいることを何となくだけど少しは、それはもう無意識レベルと言っていいぐらい少しは意識をしていて、そういった色んなことが気付かないうちにストレスとなって、その思いが澱んでスネコスリもどきを生んだのではないかとのことだった。そしてそれは伝承されているスネコスリとは違う新種の妖怪だろう、と。確かそんな感じだった。DMが大連投すぎたので、面倒くさくて全文は読んでないし、ところどころマニアックすぎて意味の判らない話があったから、ちゃんと理解できているか自信はないんだけど。

いずれにせよ、それは怪異にまつわる危険な話などではなく単に羨ましいだけの話だった。

人を好きになったり好かれたり。

好きになって欲しいのに、好きになってもらえなかったり。

好きな人は、他の人のことを好きだったり。

人の心はままならない。ままならないことがあって、気分が重くなって、足取りが重くなるのは、当たり前のことなのかもしれない。

「ええ、私もお方様をお慕い申し上げていましたが、あの方は既婚者。道ならぬ想いに私も気分が重かったものです。『恋人は抱き枕』の懸さんには理解できないでしょうけど」

ほっとけ。いいじゃないか僕が幸せならそれで。……幸せなのかな、僕？……。

何となく目についた部屋に入ってみると、そこでは奨励会員たちが将棋を指していた。奨励会の対局の合い間の練習将棋だろうか？中には月子さんもいて、今日も絶賛ツインテニーソであった。陶器のように白い、魅惑的なその絶対領域に男の子たちの視線が集中している……なんてことはなく、みんな真剣に将棋を指していた。さすが奨励会員、心に余裕がなさすぎる。

いやいや君たち、そこは一手ごとに「ハニユウニラミ」をするフリをして月子さんのおみ足をガン見しないとダメだと思うよ僕は。「アシはココロの余裕」って言うんだぜ？

「そんなことだから！そんなことだから懸さんは奨励会卒業が遅れて、中学生棋士になりそこねたんじゃありませんか！？」

ダメな奴は僕だった。

まあそんな感じで、しばらく奨励会員たちを眺めていたわけだが、あまりその場にいと僕が月子さんばかり眺めていたという、あらぬ噂を立てられかねないので、というかそれは事実だったので、これ以上の長居は危険と判断して部屋を出ることにした。

部屋を出てからもその周囲をしばらくウロウロしていると、ようやく辻村四段がやってくるのが見えた。特別対局が終わったらしい。ややくせのある、ゆれる前髪。清潔感あふれるブレザーの制服。相変わらず爽やかで、彼からはトンコツスープの臭いなどしてきそうにない。

対局の結果は判らないが、やはり足取りは重そうだった。右足首には、相変わらず暗褐色の小動物が巻き付いたままだ。そして、彼はそそくさとあの部屋——月子さんのいた部屋へと向かっていく。そそくさすぎるな。もしかすると、そこに月子さんがいることを彼は知っているのかもしれない。知っているのだとしたら、そりゃ、さっさとあそこへ行きたいよな。行きたいはずだ。それなのに。

「辻村」

皆川許心さんだった。なにやら辻村君と話しはじめている。しかし皆川さん、本人はクールを気取っているつもりかもしれないが、辻村君への好意が情報漏洩しすぎである。個人情報保護法違反ではないだろうか？小梅のような甘酸っぱい匂いがプンプンする。僕のトンコツの臭いを上書きしてしまいそうだった。辻村君ったら皆川さんにモテていいなー、あいつ爆発しないかなー。爆発しろ爆発しろ。

まあ、それはそれとして。

辻村君は、月子さんに振り向いて欲しくて。皆川さんは、辻村君に振り向いて欲しくて。人の想いの行き違いっぷり。行き違った想いは、どうなってしまうのだろう。

行き場をなくした想いは重い。いくつもの想いが、重い足――スネコスリという現象を伴っているのだとしたら確かにぜいらむタソの言うとおり、それは彼自身が自分で解決しなくてはいけないことなのだろう。

それは誰にでも起こりうる当たり前のことで。

そしてそれは、決して特別なことではなくて。

想いに縛られて足取りが重くなるなんてことは、よくある話と言えよくある話なのかもしれない。ということはスネコスリなんて、いてもいなくても、それは結局同じことなのかもしれない。だから住職やぜいらむタソが言ったように、あれは別段、危険な妖怪ではないのだろう。ほっといてもいい。ほっといた方がいい。

ソレが存在することが正しいことではないからと言って、ソレが存在することが間違いということにはならないのだ。いてもいなくても同じ。いないのと同じ。視えても視えなくても同じ。

そして、もしかしたらあのスネコスリは、彼を羨んでいる僕が勝手に見ているだけの単なる幻なのかもしれないな、と、そんなことも思ったのだった。いずれにせよ後は……この続きは僕や月萌ではなく辻村君自身の――辻村充の物語なのだろう。

「うん、ほっとくことにしよう。辻村君なら自分でなんとかするだろう」

「そうですね」

彼の物語がこれからどうなるか判らないけれど。それでも。

人の心は移ろうのだ。移ろいゆくのだ。いくつもの体験をして、ままたらない想いがやり場をなくしたり、想いが満たされたり、あふれ出したり、時には破れたり。いつかそれらは思い出となって。

そうしていくうちに、やがて辻村君の前からスネコスリは消えるのだろう。想いが成就するのか、誰の想いが成就するのか。それとも離れていくのか。離れていくのは月子さんなのか、皆川さんなのか。離れられてしまうのか、自分が離れていくのか。

でも、たとえ想いが成就せず離れ離れになることがあったとしても、それは忘れるってことではないのだと、そう思う。

人は出会いと別れを繰り返して大人になっていくけれど、それは捨てさるってことじゃない。決していらなくなったわけじゃない。次の新しいステップのための、新しい一歩を踏み出すための、また新しい出会いのための、必要な儀式。

そう、それは「卒業する」ってことなのだから。

「……黙って聞いていると何だか素晴らしい人生訓っぽいのですが、懸さんの凄いところはその一連の語りが、美少女フィギュアにまつわる体験談を元に行っているところですよ？」

ほっとけ。超ほっとけ。大体合ってるけど、だからこそ、そこはほっとけ。

どんなものにも仏性はあるどんな経験からでも真理は得られるのだと、そう住職も言っていたではないか。フィギュアで悪いか！誰も彼もが辻村君みたいに女性にモテるわけじゃないんだよ？ツクモくん……。

「ですよー、懸さんは弥内さんに振り向いてもらえないどころか全力でかわされてますもんねー」

それもほっとけ。その話題に触れるな。ていうかそのエピソードについては「駒.zone vol.3」の番宣だけしておけば十分だ。

全く……。僕も少しはファッションに気を配ろうかな、なんて柄にもないことを考えていると「でも懸さんも、新人王戦決勝の時の和服姿、カッコ良かったですよ？」

という声が聞こえたような気がして。ハッとして後ろを振り返ってみたけれど、そこにはもう月萌の姿はなくなっていた。冗談の好きな子なので、また僕をからかったのかもしれない。

辻村君はモテるだけの男ではない。強い将棋だ。きっとタイトル戦線に出てくるだろう。だから彼とは、これから将棋で雌雄を決する日がくる、と思う。そういう日が来る。来なくてはならない。いや、そうするのだ。

彼にはファッションでは勝てないかもしれないけれど、将棋ならまだ間に合うかもしれない。それに……。

「タイトル戦なら和服だしな」

レンタルだし。せいぜい高級な和服を紹介してもらうことにしよう。予算の範囲内で。

なんてことを思いながら、ふと辻村君の方を見てみると、いつの間にか皆川さんの姿はなくなっていて、彼は一人でその場に佇んでいたのだった。そして――。

「ど、どうしちゃったの？辻村君！？」

辻村四段の足元。暗褐色の子犬のような小動物が巻き付いている右足首と対になる、もう片方の足、左足首には――。

全身が深い藍色で覆われた子猫のような小動物が巻きついていて、そして辻村君を熱く見つめながら「かまって、かまって」と、声なき声を発していたのだった。

くそっ、また誰か辻村にラブラブ電波を発射しはじめたというのか……！？

もうあいつ、超新星大爆発すればいいのに！

新たに現れたもう一匹のスネコスリ。そのわけは？

……「駒.zone」連載小説「七割未満」の今後の展開に乞うご期待！

(了)

*この作品はフィクションです。実在する人物・団体とは関係ありません。

実在するtwitterアカウントが登場していますが、いずれもご本人の了承を得た上での、あくまでもこれはネタであることを申し添えます。

[参考文献]

柳田國男（1977）『妖怪談義』講談社

水木しげる・村上健司（2005）『日本妖怪大事典』角川書店

全日本妖怪推進委員会（2005）『写真で見る日本妖怪大図鑑』角川書店

清水らくは『五割一分』/『七割未満』<http://rakuha.web.fc2.com/>

はい、やってきましたコンピュータ将棋の話をする音声研究者です、こんにちは。

今回何について語ろうかと悩んだのですが、編集長のらくはさんに相談してみたところ「強さとスペックの関係」という素敵なお題をいただきました。コンピュータって速ければ速いほど強くなるの？ 本当に強くなるの？ どれくらい強くなるの？ ということですね。

まず、今のコンピュータ将棋の強さというのは二つに分解することができます。一つは「局面評価の正確さ」で、もう一つは「読みの深さ」です。局面評価というのは局面をぱっと見てどちらがどれくらい優勢なのかを判断するという技術です。これは、コンピュータのスペックにはほとんど関係ありません。そんなにメモリも食いませんし、CPUの速さも必要としません。コンピュータのスペックが関係してくるのは読みの深さです。演算速度が速ければ速いほど読みが深いです。

というわけで、読みの深さと演算速度について語ることになります。

第一回電脳戦でボンクラーズが一秒間に何局面読めるかというのが話題になりましたが、これが読みの深さと直結することになります。ボンクラーズは一秒間に1800万局面読めるということでしたが、これがおよそ何手に相当するかというと、だいたい15手前後です。意外と読めていません。これはあくまで1秒間の話ですが、10秒間では何手読めるのでしょうか。答えは17手前後です。では、100秒では？ 19手くらいです。2分弱で19手です。やはり意外と読めません。局面の複雑さによっても読める深さが変わってくるのですが、とりあえずそれくらいが基準になります。局面によっては10手になったり30手になったりします。

2分19手でなんであんなに強かったのかというと、人間と違って読み抜けがほぼないからです。読み抜けがないというのは言い換えれば、人間が読まない筋まで読むということでもあります。これがコンピュータ将棋の強さです。

ところで、ボンクラーズは米長先生のご家庭にもミニチュア版が設置されたということが知られています。こちらは演算速度が約10分の1だそうです。演算速度がそれだけの場合、1秒で何手読めるのでしょうか。答えは、約13手です。10秒で15手です。なんとなく、4手とか5手とかしか読めそうにないと勘違いしそうになりますが、ご家庭のコンピュータでもそれくらい読めます。

難しいことは置いておいて、ものすごく簡単にいうと、演算速度が10倍（あるいは10分の1倍）になっても2手しか読みの深さは変わらないのです。また、思考時間が10倍（あるいは

10分の1倍)になっても2手しか変わらないのです。

実際、米長先生はボンクラーズ戦後、「自宅のパソコンと強さは大差ないように感じた」とおっしゃっていた記憶があります。これはコンピュータ将棋開発者からすれば、そりゃそうだろうなあという感じで、たかが2手の違いでそんなに強さが変わるはずがないのです。

で、ようやく今回の話の核心に入ります。「なぜ、コンピュータ将棋選手権には高いスペックのコンピュータが登場するのか」です。

ここまでの話では、15手と13手が変わらないんだから、強さが変わるはずがないという話でした。でも、これは人間vsコンピュータの場合です。

そう。

コンピュータvsコンピュータの場合には事情が変わるのです。

コンピュータ同士の対戦では、1手深く読めるだけで強さが相当変わってくるといわれています。15手と13手では強さがまるで違います。人間の感覚では同じに思えるこの深さですが、コンピュータにはこれが命取りになります。

これがなぜなのかということを説明するのは結構難しいのですが、例えばこういうことです。13手読んだ段階では圧倒的に駒が不足しているかのように見えたけれども、15手読んでみたらなんと相手の玉が詰んでいた、なんてことがコンピュータ将棋ではよくあります。これは極端な例ですが、ちょっとした駒得が13手では見えなかったけれど15手では見えるなんてことはしょっちゅうです。

だから、コンピュータ将棋選手権には高いスペックのコンピュータが登場します。

つまり、人間vsコンピュータと、コンピュータvsコンピュータとでは同じ将棋でありながら競っているところが全く違うのです。

将棋の強さっていったい何なんでしょうね。

らくはさんがおそらく適当に出したであろう「強さとスペックの関係」というテーマは、そんな哲学的なところまで踏み込んでしまう話でした。

結論として、らくはさん最強。

ぼくの名前は「ぽふぽふ」。

この前は小さな公民館で開催されている将棋道場を見学したのだけど、今回は大会だよ。道場でワイワイ指しているときと違って、みんな真剣勝負。そんなちょっとドキドキするような大会の様子を見てみよう。

大会には種類があって、全国大会への出場権を争うものや、地元新聞社主催のものもある。全国大会を目指すということは県代表になるということだから、相当に強い人だよ。いろんな大会があるから、自分の棋力に応じて参加してみるといいかな。

今回やってきたのは、2つの大会が同時に行われている会場。ひとつは県代表を目指すアマ名人戦、もうひとつはクラス別で優勝を決める大会。ぼくはアンドロイドで、現代の世界では「こども」の姿をしている。将棋は指さないけど、見学は自由だから、あちこち動き回って観察することにした。

アマ名人戦の県予選には、50人くらいの参加者がいるみたい。参加資格は特に指定されていないから、高段者の人じゃなくても参加OKだよ。強い人と将棋を指して勉強したい人もいるし、記念参加が目的の人もあるのかな。4人1組でブロックを作った対戦表が壁に貼り出されて、みんな注目している。県代表経験者と同じブロックになった人からは、早くもため息が聞こえてくる。2勝通過、2敗失格システムなので、2連勝して早々に決勝トーナメントに行けるといいね。仮に2敗しても、大会によっては裏トーナメントと称して、早指し大会をやることもあるよ。たくさん指せると嬉しいよね。

もうひとつの大会は地元新聞社主催のクラス別の大会のようだ。段や級をA～Cクラスのようにグループで分けて、ほぼ同じ棋力同士で戦う順位戦みたいなもの。クラスごとにリーグ表が作られて、1人あたり4局指して獲得点数で順位を決めるみたい。参加者が多いと総当たりの対局ができないから、スイス方式を採用していることが多いかな。スイス方式を使うと、勝った者同士や負けた者同士などが当たるシステムだから順位が付けやすい。大会運営も時間との戦いだから、効率の良い方法が必要なんだよね。

大会は午前中に2局くらい指して、お昼になることが多いかな。
弁当が支給されている大会だと、そのまま会場で食べられるから便利。
だけど、勝敗によってその味が変わってしまうよね、きっと。

そういえば、プロ棋士が派遣されている大会もあるんだ。
指導対局をしてもらえることもある。
普段、プロ棋士に会えない人も、こういう時はチャンスだから参加するといいかも。
あと、アマ竜王戦の県予選に出場すると、扇子が貰えることもあるよ。

さてさて、対局が始まったので見てみようかな。
盤と駒は大会によって違うけど、今回は薄いシートにプラスチックの駒を使うようだね。
お互いに丁寧に駒を並べていく。
王様は「王将」と「玉将」の2種類があって、下位者が「玉将」を使うことが多いかな。
だけど、大会だと相手の棋力が分からないから、どちらでも良いかも。
遠慮しがちな人は自分から「玉将」を選ぶこともあって、謙虚だなと感心。
あとは、先手番になった人が「玉将」を選ぶこともあるけど、まあ対局者同士で決めれば良いかな。
先手・後手は「振り駒（ふりごま）」で決めよう。
振る人が自分の「歩」を3枚か5枚取り出して、両手に包んでシャッフルする。
そして、盤の上に放り投げると、「歩」か「と」が何枚か出るよね。
このとき、「歩」が多ければ振った人が先手、「と」が多ければ相手が先手になるんだ。
3枚か5枚かは対局者同士で決めれば良いのだけど、プロの対局だと5枚が一般的だよな。

次に、対局に必要な時計。
針を使うアナログ式とデジタル式の2種類があって、秒読み有りの場合はデジタル必須。
アナログ式は例えば持ち時間20分だとすると、20分後に針が真上（12時）に来るようにセット。
針が真上に近づくと、少しずつ赤いレバーが右に押されて、最後は針が押し切って終了。
時間が切れると、赤いレバーが針の支えを失って、寂しげに下を向いてしまうんだよね。
この赤いレバーが徐々に持ち上げられていく数分間が対局者にとって最も辛い時間かも。
デジタル式は秒読みにも対応していて、時間をセットすれば残り時間を1秒単位で表示してくれる。
音が鳴るので、秒読みに追われると恐怖の音に聞こえるかも。
どちらの時計も2人分の時間を表示しているから、自分の時間も相手の時間もすぐに確認できる。
また、時計の上にボタンが付いていて、自分が指した後にボタンを押すと、相手の持ち時間が減るんだ。
ときどき、ボタンを押し忘れて、相手が指す時間なのに、自分の持ち時間が減ることがあるから

要注意。

勝負に厳しい人は、そのまま無言で指さないこともあるんだけど、教えてあげると優しいよね。このあたりは、勝負に徹するかどうかで判断が難しいのだけど。

ちなみに、対局時計を置く位置は、後手番の利き手の位置が一般的だよ。

時計のボタンは駒を持つ手で押さなくてはいけないので、右利きの人は右側に時計があると早く押せる。

つまり、利き手に近い方が時間の節約になるんだよね。

後手番になった人が好きなように時計を置けるというのは、先手番でないことへの穴埋めみたいなものかな。

細かいことを言うと、右手で駒を操作して、左手で時計を押すのは駄目。

右手で相手の駒を取って、駒台にその駒を置く前に、そのまま右手で時計を押すのも駄目。

だから、時計の位置って、意外と重要だったりするんだ。

最後に、対局の時間。

アマチュアの大会は、時間内に大会を終えなくてはいけないから、基本的に「切れ負け」を採用している。

「切れ負け」とは、持ち時間が固定されて、その持ち時間を使い切った時点で、負けとなるルール。

どんなに優勢でも、相手より先に持ち時間が無くなったら負けなので、非情な戦いがときどき起こる。

例えば、相手より早く指して、ひたすら守りを固める人もいるよ。

最終盤に、詰まないのに王手ラッシュをして、相手の時間を使わせる人もいる。

でも、時間はお互いに平等に与えられるものだから、どういう戦い方をしても、文句は言えないのね。

20分か30分の持ち時間が多いけど、ちょっと考えているとあっという間に時間が減ってしまうから、急がねば！

だけど、慌てて指すと悪手になって、時間を余したまま詰まされることもあるから、しっかり読まないとね。

この時間の使い方は「切れ負け」に慣れている人が有利だけど、いかに相手に時間を使わせるかがポイント。

複雑な局面に誘導したり、序盤から乱戦に持ち込むなど、意外と面白い戦略もあるんだ。

ちなみに、県代表を決める大会だと、決勝戦は秒読みが付くことが多いかな。

例えば、30分の持ち時間を使うと、そこから1手30秒以内に指すという具合。

デジタル式の対局時計が秒読みのアラーム音を鳴らして、緊張感がすごいんだ。

先手・後手を決めて、対局時計の位置・時間もセットして、いよいよ対局開始。

ちなみに、対局はすべて「平手（ひらて）」で、駒落ち戦はなし。

1局目というのはとても大切。

スイス方式がベースになっていると、最初に勝たないと価値が下がってしまうんだ。

1勝した者同士で2局目を戦うことになるから。

最終的な勝ち数が同じでも、その意味が全然違ってくる。

よろしくお願いします、の挨拶を経て、みんな全力で指そうね。

アマ名人戦の県予選は参加者のレベルの幅が広くて、圧倒的に強い人から背伸びしている人までいろいろ。

だけど、ブロックの関係でうまく勝ち上がる人もいるし、一発勝負ゆえに得意戦法がヒットすることもある。

また、20年以上前に県代表で活躍していた人や現役の県代表クラス、あるいは小学生も混じって年齢層も幅広い。

何度も大会に出ていると、常連さんとして覚えてもらえるかもしれないよ。

あと、対局者の周りに観戦者が群がることもあるから、そういう緊張感も味わうと意外と楽しいかもしれない。

時間とギャラリーの視線というプレッシャーの中で、堂々と将棋を指すのは大変なんだけどね。

午後の時間になると、地元新聞社主催の大会は佳境に入った感じ。

貼り出されたリーグ表に○や×が次々と記入され、連勝している人、勝ったり負けたりの人、全敗の人など。

小さい子供が多いクラスには、親の視線も鋭くて、真剣モード。

思わぬ敗戦に泣き出す子供もいるけど、一喜一憂する姿は微笑ましい。

最終的には、クラスごとに優勝者や入賞者を決めて、表彰する。

上位3位までは新聞に名前が掲載されたり、副賞が豪華だったり、小さな大会とはいえ、楽しいよね。

強い子は、大会ごとにクラスを上げていくこともあるよ。あっという間に追い越される大人がちよっと切ないかも。

環境面にも触れておかないと。

昔は、対局中に喫煙できる時代があったんだよね。

困った時は、相手の顔にプハーって煙を出して「盤外戦術」を使う人もいたとかいないとか。

でも、今は道場もそうだけど、大会も禁煙が基本。

だから、タバコが苦手な人も安心して参加できるよ。

あと、身障者の方が参加できるようにいろいろと工夫がされているよ。

車椅子の方が対局できるスペースを確保してあったり、盲目の方に棋譜を読み上げたり。

大会に参加する人がみんな楽しめるといいよね。

アマ名人戦の県予選も決勝トーナメントがどんどん進み、決勝戦が始まっている。
夕方近くになると、地元新聞社主催の大会は終わってしまい、子供たちは帰ってしまった。
残されたこの一局には、根っからの将棋ファンがずらりと周りを囲んでいる。
一手指すごとに形勢が変わる難解な中盤戦。
それを見守るギャラリーはみな黙っている。
声を出してはいけないし、対局者への余計な刺激は避けなければならない。
だから、会場はシーンと静まり返っている。
そして、駒音と対局時計を叩く音だけが響いている。

大会に参加する人の目的は、その多くが優勝を目指すことかもしれない。
いつもは道場や自宅で腕を磨き、その成果を試す場として大会を利用する人もいるかもしれない。
強い人と対局して、何かを得たいという人もいるかもしれない。
支部対抗戦でライバル支部にぎゃふんと言わせたいという人もいるかもしれない。

どんな目的であれ、大会に出ていろんな人に出会い、将棋を指す。
もちろん、観るだけでも楽しいし、仲間を増やせるかもしれない。
人と人との「ふれあう将棋」を通して、将棋の魅力を広く伝えられるといいよね。
面白そうだな、やってみようかな、と思ってもらえるように。

ぼくは将棋の普及のために未来からやってきた。
道場や大会は人を通して将棋が指せる場所。
もっともっと楽しんでもらえるといいな。

将棋の団体戦には、独特の味わいがある。その中でも大学将棋の団体戦においては、オーダーの組み方が非常に重要である、という点が特徴的である。

五人ないしは七人で行われる団体戦では、オーダー順は固定ながら出場選手は対戦ごとに変更できる。つまり
五人制だとして、

1. **ABCDEF**GH IJ 2. ABCDE**F**GH IJ 3. **A**BCDE**F**GH IJ

上記のどのように出場させるのも可能である。しかし、多くの場合3.のように飛び飛びで出場させることになる。もし1.や2.のようなメンバーが出ることになるとしたら、よほどの奇策かオーダーの組み方自体に問題があった、ということになるだろう。

では、オーダーとはどのように決められていくのか。とりあえず、あるチームがベストオーダーを組むまでについて眺めてみよう。以下、スーパーエース(よほどのことがない限り勝ってくれる強豪)を**S**、エース(ほとんどの場合で勝ちを計算できる)を**A**、その他のレギュークラス(エースに一発入ることもあるが、下に取りこぼしもするぐらい)を**B**、その他(力は足りないが人数の関係上登録されている)を**C**と表記する。

甲大学の場合

甲大学将棋部は、長らく人数不足の中一人のSが引っ張ってきた。しかしSが四年生になった年、一年生に二人のAが入部してきた。他にも二人のBがおり、上位に入れる戦力が何とかそろった。しかし部員数は七人で全員出場するしかない。

オーダーを決めるに当たり、Sは四年生でもありスーパーエースであるという自覚から自ら大将を買って出た。そして新入生のA二人をその下に起き、結局は素直に力順に並べることになった。つまりは【SAABBCC】である。

大会当日、二人のA加入により、下位校に対しては楽に勝ち、迎えた三回戦。いつも接戦で負ける α 大学との対戦、相手校レギュラーの戦力は【AAABBCC】であり、Sがいる分、甲大学が有利

かにも思えた。

しかし、相手校には14人全員オーダー表を埋めるだけの部員がいた。この時点で、実は甲大学は不利に陥っていたのである。実際の対戦は以下ようになった。

甲【SAABBC】

α 【CACABB】

ここまで α 大学は【ACAABBC】というオーダーを組んでいた。しかし甲大学戦では、七将のCをはずし大将にCを入れてきた。このように相手の強豪に下位選手を当ててその対戦を半ば捨てることを「当て馬を当てる」と言う。

対戦をよく見ると、4567将戦において α 大学の方が有利になっている。また副将戦もいわゆるガチンコ対決であり、期待値は0.5勝である。つまり恐ろしいことに、出場選手の総合力では甲大学が上回っているながら、対戦した時にはすでに α 大学が有利になっているのである。

甲大学が負けるとして、何が敗因だったのか。一つには人数不足が上げられる。七人しかいないため、相手にとっては当てたい相手を確実に当てられてしまうのである。もし甲大学にたった一人でも控え選手がいたとしたらどうか。オーダー表に【CSAABBC】と書いていたとしよう。そして α 大学戦で大将にCを入れたとする。すると

甲【CSAABBC】

α 【CACABB】

という対戦になる。これで大36将戦がガチンコになった。副将戦は甲大学が有利であり、ガチンコ対決を全てものにすればチームが勝利できるという意味では、先ほどよりはましな対戦となっている。

α 大学としてもこのようなケースを避けたいと考えれば、大将にCを入れるかどうか迷うことになる。一人人数が加わるだけで、相手にとっては大きなプレッシャーになるのだ。

甲大学の敗因はもう一つある。オーダーを素直に並べ過ぎたことだ。チーム構成上甲大学が考えなければならないことはいくつかある。チームが勝利するためには最低でも四勝せねばならず、そのためには最低でもBBCCのうち誰かが勝利せねばならない。つまりこの四人が戦力となるような当たり方をせねばチームとしては苦しいのである。できればBはBかC、CはCに当たるような展開を作りたい。またSAAはできるだけ無駄にならない相手と当りたい。特に相手にSがない場合、自チームのSはAをつぶしておきたい。Aに関しては、Bに当てて確実にとりに行く、という戦略もある。まさに今回の α 大学がそうにしたのである。しかし甲大学は出場選手を変更でき

ないので、いかに相手に戦略を取りにくいオーダーを作るか、が大事である。並びを変えられないのにそのようなことが可能か、という問いに対しては、相手校が戦うのは甲大学だけではない、ということがヒントになる。

さて、ここで私が甲大学の部長だったらどのようなオーダーを組むか、ということを考えてみたいと思う。相手校との兼ね合いもあるが、とりあえずは以下のようなオーダーから考える。

【CASA BBC】

普通どのようにオーダーを考えていくのかは知らないが、私の場合だいたいこれが基本形となる。まずは大将から考える。各大学、当て馬については常に考えるものであり、一番上にはCを入れていることが多い。最初からCを出し、重要なところで引っ込めてガチンコを仕掛けるという逆の戦略を仕掛ける場合もある。しかし、上に二枚Cを並べるということはしにくい。下の方でオーダー調節がしにくくなるうえに、二枚とも出す事態はなかなか生じないからである。また大将にBを置くのも少し勇気がいる。というのも、Bを外してCを入れるという戦略は、総合力が落ちるのでリスクな選択になるからである。大将でBを出すということは、相手校のSやAにやられ続ける代わり、固定の当て馬相手を確実に拾っていくという戦略になる。

そんなわけで大将のCは、「相手のSやAを空振りさせる」「Bなら頑張れば勝つこともあるかもしれない」「C同士ならガチンコになり御の字」という理由で、人数不足のチームでは損がないのである。

またASAと並べたのにも理由がある。相手校として見れば、Sに誰を当てるかが課題となる。できればBは当てたくない。Sがいるチームならば、ガチンコを仕掛けるかどうかもあるだろう。 α 大学のような場合、C(当て馬)を当てたい。ここで重要なのは、SをAで挟んだ場合、当て馬を使うと、もともとSと当る予定だった人は確実にAと当るということである。実は先ほども α 大学は3将にCを入れていた。Sに当て馬を当てられるオーダーだったのだが、同様に当たった場合どうなるだろうか。

甲【CASA BBC】

α 【CACA BB】

甲大学はSをすかさされたものの、大2 4 6将がガチンコになった。3将がほぼ勝ちであることを考えれば、かなりましになったと言えるだろう。しかし α 大学がこれを避けようとする、「相手のCにAが当たる」もしくは「相手のSにAが当たる」事態はほぼ避けられない。上の方に控えめ

メンバーを固めると、相手校も人数豊富な場合下の方で狙い撃ちされてしまう。相手が甲大学だけでなく以上、オーダーは基本的には人数豊富な相手を考慮して組むものなのである。

オーダーを少し変えただけで、相手校の悩みがかなり増えたことがお分かりいただけただろうか。

乙大学の場合

メンバーを考える際には、棋力以外にも重要な要素がある。例えば乙大学では、C1とC2のどちらかが出場することになり、二人をどのような配置にして、どのようなパターンで出すかを考えなければならない。

C1は時折上は一発入れるがコロッと負けることもある三年生である。一つの考え方として、彼を当て馬大将に置くとする。すると相手校にとって、過去のことから名前を知られている可能性が高い。Bを当てても確実に勝てるとは限らないとか、C同士だと不利になるのではないかと相手に考えさせるだけでも意味がある。

C2は一年生で、大会前の部内リーグなどでCクラスの中で一番いい成績を収めた。棋力で言えば一番期待ができるので、七将などでずっと出すのも手である。また、確実に相手も当て馬を出すだろうときに大将で出すという作戦もある。しかし一年生にその役目を任すかどうかは悩むところである。たとえば初戦相手校の人数が足りず不戦勝になるような場合、C2の名前をあえて出しておき、「強い新人が入ったかもしれない」と思わせておくのも得になる。C1を下に書いた場合には、ここであえてC1を不戦勝にさせ、C2を次からオーダーに入れるという作戦もある。C1よりも期待できる棋力だと相手は思うかもしれないし、最初のうちに新人に場馴れさせるためあえてC1を下げたと思われるかもしれない。どちらにしろ、少ない手駒で出来るだけ相手に悩んでもらった方が乙大学にとっては得なのである。

さて、乙大学にはもう一つ悩みどころがある。それはA1の性格である。彼は棋力はあるのだが、プレッシャーに弱い。そこで彼をどの位置に置くのかも重要になってくる。プレッシャーに弱いからと言って5将や6将で出してしまうのはもったいないし、何より相手校もそこにAクラスを当ててきたときに余計にプレッシャーを感じてしまう。一番考えられるのは大将である。なぜならそこは隣が一人しかいないので、戦況がわかりにくいのだ。副将はできるだけ安定した成績を残すA2、もしくは序盤が非常にうまいB1を考える。A1にとって比較的周囲を見回す余裕がある時間に隣が形勢を損ねることが一番悪い状況と言える。「自分が勝たねば」という思いを強くしてしまうからである。

とはいえ大将は他の作戦との兼ね合いも考えなければならない位置である。よって、次の候補は副将となる。できるだけSやAを隣に配置し、下位の苦しい様子を気にさせないことに気を遣う。もしくは明らかに当て馬であるCならば、負けて当たり前なので気にすることも少ないだろう。

また私のこれまでの経験上、3将や4将が意外と勝負将棋になることが多い。枚数が揃っていないチームにとって、SやAを置いても当て馬を当てられにくく、そのうえ無駄が生じにくい位置が3、4将なのである。よってA1をここに置くと常に大事な対局が続くことになる。大将・副将は相手が外してくれる位置であり、プレッシャーのかからない対局が生まれやすいのである。

これ以外にも、戦型なども考慮することがある。対振り飛車が得意な人に的を絞らせないために、居飛車党・振り飛車党を交互に配置するというのも大きな意味のある作戦である。また「棋力よりも強そうに見える」ということすら作戦によっては役に立つ。見た目も大事なのである。

もしオーダー学と言うものがあるならば、今回書けたことはそのほんの一部でしかない。現役学生などはもっとずっと先を見ていることだろう。何にしろ団体戦というのは対局者だけで決まるのではない、オーダーをどうするかによって大きく結果が異なるのだということを実感していただければ幸いである。

～俺たちはあの切なくて笑っちゃうほど痛い夏に別れを告げなければならなかった編～

駒とおむすびとペンギン

～俺たちはあの切なくて笑っちゃうほど痛い夏に別れを告げなければならなかった編～

それはとある夜のことでした。

アルバイトで朝刊を配っていた半島はふと気付いたのでした。

「この胸の疼痛はもしや失われた神々の評定によって狂わされた不透明な明日の教示か……？」

彼は体にひどい疲労感を感じていました。

そう、朝刊を配った後では体力が続かず自転車をこぐことが叶わなかったのです。

彼は悩みました。このままでは駒おむペンの記事が書けない、と。

もし自転車をこいでしまえば、今度はアルバイトに支障が出てしまう。

いったいどれだけの日が企画構想に費やされたのでしょうか。

苦しんだ挙句、彼の中のもう一つの人格は次のように提案をしたのでした。

「限りなく現実に肉薄する残酷なテーゼを指し示せばモノリスへ至る道はひらかれるのではないだろうか」

自転車がダメなら朝刊用のスクーターで記事を書けばいい、それはかすかな希望を彼に与えました。

しかしそのアイディアを実現させるには多くの障害を乗り越えねばならない、当時の彼にはそのことを推し量るすべはなかったのでした。



ペンギン「バイト先には恥ずかしいから俺を持っていけない？ 諦めんなよ……どうして諦めるんだよそこで！！ お前のことを応援してくれている人たちのことを考えろよ！！」

僕たちの夏が、いま、始まる……………！



はいっ！　というわけでね。おまっとさんでした駒おむペンです！

今回は夏という事で駒娘たちが水着に大変身！　この記事の数少ない将棋成分の大部分だ、と編集長に指摘されて若干落ち込んだりもしましたが「うるさい！　おむすびは駒のメタファーなんだよ！！！！！」と逆切れしながら記事を書いています。半島です。

それにしてもセンターの銀ちゃん、ノーメガネですねえ～。

眼鏡っ子は眼鏡とセットでこそ真価を発揮しますが、眼鏡がなくて前が見えない状態もなかなか.....。

今回はスペシャル的なノリで若葉さんががんばってくれました！

若葉さんいわく、銀ちゃんは目を、桂ちゃんは髪を、香ちゃんは「胸を」がんばったそうです。.....というか待て最後。

それにしても駒娘もいよいよ3人になりました。早いものですねえ。

どの娘さんにも象徴する「おむすび」を僕は毎回考えているんですが、今回は「銀ちゃん」ということで、銀ちゃんのおむすびを作ろうと思うんだぜ。え？　銀な具って何かって？　あれですよ、あれ。ふふふ。

今回は意外と知られていない新聞配達のこともしつつ、仕上げにおむすびを食おうと思います。男の汗は美しい！　仕事の後のおむすびはかぶりつくだけの価値がある！　う～んマングム。

1 : 2 0

真っ暗な夜道を抜けて出勤するとそこには深夜にも蛍光灯の明かりがぼしぼし照らされた事務所があります。新聞配達員の朝は早い。

新聞が配送されるのを見計らって、チラシを組み始めます。もちろん手作業です。

雨の日はビニールをかけ、土曜日には大量のチラシのせいで普段の3倍くらいの重さと厚さと戦う、それが配達員の日常……。

この時、新聞の一枚目に棋士の情報がちらっと載ってたりするんです。

羽生さんと森内名人の勝敗などは、さりげなくにわかな僕でもチェックしてました。

配ってる途中にある新聞の一面に里見さんの写真が載ってたりすると「おおおおこの人がらくはさんの言ってた人か！ 出雲のイナズマ！」とテンションあがったりしちゃうんですね。恐るべき将棋パワー。

2 : 1 5



新聞を組むスピードが普段通りなら、この時間帯にバイクに積むことができます。

あまりにも時間がかかりすぎると配り終わるまでに6時を回ってしまい遅配となってしまうんです……。お客さんに「ちょっと新聞着てないんだけど!?」なんてクレームの電話が入ったら大変。なるだけ急いで出発します。

2 : 3 0

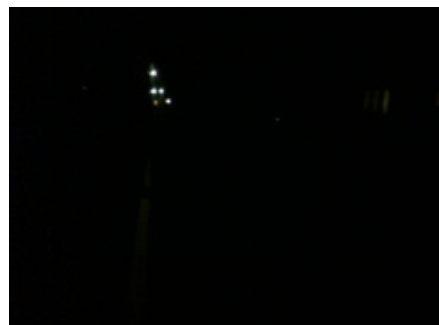
夜の街は当然のことながら真っ暗です。

だいたい車通りや人通りはほとんどないんですが、たまにいらっしやいます。

そういう場合はほとんど注意をしていない状態なので事故が起きやすい……命がけです。

ここで大事になるのが、実はポストの形状なんです。

ポストにもいろいろあるんですが、当然のことながら「新聞」を「ポストにあわせて」入れます



。
綺麗にたたみながら新聞をいれるのって難しいんだ……。

アメリカ風のポストだったり、ドアに付属されてるポストだったり、集合ポストだったり……ポストの形状に合わせて新聞を投函するセンスが必要になってきます。
土曜日なんか厚さ1.5cmくらいの新聞を三つ折りにするからね。それを200枚近く……。
手首？ うん、そうだね！ 関節炎だね！

3:30

オートロックマンションでかなりの部数をさばけました。
さてさて、いよいよここからが時間との闘いです。時間指定のお客さんのお宅へ先に新聞を入れなければなりません。4:00、4:30などのDead Lineが指定されていて、それを過ぎるとまずいのです。
お客さんの中には早朝にお出かけになる方もいるので、電車の中や会社で気持ちよくお読みになれるように急ぐ、急ぐ、急ぐ！！



4:30

そろそろ夜が明けてきました……。
頭がもうろうとしてくるのもこの時間です。



なんか……もう適当でいい気がしてきちゃいます。
なんで俺、こんなことでがんばってるんだろうって……。

ペンギン「……一番になるって言ったよな？」



え？

ペンギン「日本一なるつつたよな！ぬるま湯なんかつかってんじゃねえよお前！！」

で、でも.....

ペンギン「諦めんなよ！！ どうして諦めるんだそこで！ 駄目だ駄目だ駄目だ駄目だぜっっったいに駄目！」

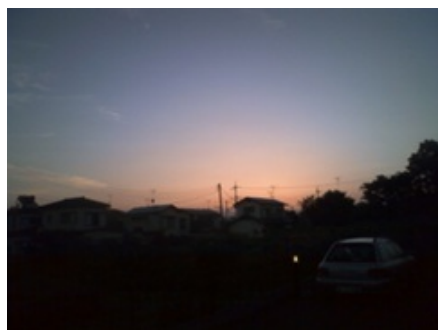
ぺ、ペンギンさん！！！！

オレ.....間違ってたよ！！！！！！

.....という妄想が脳内で再生されるくらいこの時間帯はきついです。
車もライトを消してしまう人が増えてくるので、下手すると接近に気付かない！
これは新聞配達に限らず、すべての車両が危ない時間帯です。



中継地点に置いてもらっていた新聞を補充して.....さあ！ 後半戦の始まりです！
意識がもうろうとしていると新聞を入れ間違えたりだとか、入れるべきお宅を飛ばしてしまったりしてしまいます。焦らずゆっくり着実に入れなければなりません。



5 : 3 0

空を見上げれば小憎らしいほどの日本晴れ。

ようやく最後の一軒に新聞を配り終えるころには世界はもう朝です。
肩も腰も目も足もみーんなお疲れモード。一気に脱力します。
配るのが早い人は4時半くらいに終わるそうなんですが、正確さを重視するとどうしても時間が
かかってしまいますね。今日も気持ち良く配ることができました！

さて、仕事も終わったことですし朝ごはんを作りたいと思います。
もちろん朝ごはんは「おむすび」です。

銀っぽいおむすびをいろいろ考えてみたんですが、ここはやはり「銀シャケ」ではないかな！！
とね！
ぽかぁ思うわけなんですよ！ うんうん！
え、安直？ 言ってやるなよ。



スーパーで買った甘塩シャケ（塩麴漬）をアルミホイルに包んでフライパンで焼きます。
もちろんグリルで焼いたほうがおいしいのですが、手間を省きたいときはこちらの方法がお勧め
です。キノコや野菜をしきつめて、みりんで溶いた味噌をくわえてちゃんちゃん焼き風にしても
Good！



..... ちょっとバターを入れ過ぎてしまった感がありますが火は通ったようです。
配達で疲労困憊していて思考能力が「もうやめてペンギンのライフはゼロよ！」な状態になって
おります。もうこのまんまゴール（実食）してもいいよね？ いやいや駄目駄目。



次にラップを敷いて、その上に白ゴマを散らします。

鮭には海苔かとも思ったんですが、バターと塩麴の甘さが嫌味になるかなと思って白ゴマをチョイス。

ふんわりざっくり握ります。

これで銀ちゃんおむすび「幼馴染の男の子に何かにつけて口うるさく小言を言うてくるツンデレ委員長風」は完成です！ いや、キャラ造形の打ち合わせで担当の若葉さんと盛り上がってしまって、いまでもどうして委員長なのかは謎です。攻守ともにそつなくこなすから～というイメージだけでなぜこうなった。前にご飯粒がついてるのはご愛敬。



いや、いい加減お腹がすきすぎてやばいです……。

一口ほおばると、ゴマの香りが口の中一杯にひろがります。

噛めば噛むほどゴマの香りが鼻をくすぐって、シャケのインパクトが舌に……。

やはりシャケおむすびは定番ですね！

銀のおむすびはこれで決定です！

銀についてのコラムですが今回は別枠を用意しました。

今回のネタは立原道造という昔の詩人です。

ちょっぴり真面目風？に書いてみました。よければあわせてご覧ください！

特別編～ぼくと駒～

またある夜に 立原道造

私らはたたずむであらう 霧のなかに
霧は山の沖にながれ 月のおもを
投箭（とうせん）のやうにかすめ 私らをつつむであらう
灰の帷（とばり）のやうに

私らは別れるであらう 知ることもなしに
知られることもなく あの出会った
雲のやうに 私らは忘れるであらう
水脈のやうに

その道は銀の道 私らは行くであらう
ひとりはなれ.....（ひとはひとりを
タぐれになぜ待つことをおぼえたか）

私らは二たび逢はぬであらう 昔おもふ
月のかがみはあのよるをうつしてゐると
私らはただそれをくりかへすであらう

小学生の時からぼくには将棋が難しすぎた。
果てしない戦術、相手の手を読む姿勢、絡まってしまうほどあるセオリー、そんな諸々のアイテムがぼくにはどうしても楽しめなかったのだ。
けれど駒は好きだった。

ぼくが将棋の駒に初めて触れたのは小学生の時だった。
まだ当時4年生だった姉が学校で将棋を覚えてきたことがきっかけだった。
親父が気まぐれに買ってきてくれた将棋セットを使って、何度か姉弟で遊んだことを覚えている。

「これは香車っていうんだぜ？ そしてこれが飛車」
姉は駒の並べ方から、崩し将棋、と金将棋などのルールを教えてくれた。
昔から負けず嫌いな人だったから、弟より優位に立って何かを教えたかったのかもしれない。
弟というものはいつの時代も姉のうっぶんを晴らすために存在している。

「角はそんな動きしないよー。それ反則！ ぶぶー反則負け！」
駒の動き方の把握すらおぼつかない、ぼくはそんな愚弟だった。
それでも何度かは姉の軍を脅かしたこともあったらしい。
ふとした時に姉は王をひっくりかえした。

「王様はね、ワープできるんだよ。ほら」

「げっ！ そんなこともできんのー？ えー」
ワープ機能を有した王は、ぼくの軍を蹂躪しつくした。
やっぱり王様ってすごいんだ、2年生だったぼくは不思議と感動していた。

将棋での知恵比べや、勝ち負けうんぬんよりも駒を動かすことが単純に楽しかったのだろう。
ぼくのスーパーウルトラ香車はしばしば一手で相手の軍を2枚ぬきしていた。

高校生になると将棋部の友達ができた。
そいつの棋力は素人に毛の生えた程度のもので、ずぶの素人のぼくが出鱈目にさしても4回に1回は勝つことができた。
二人で昼休みになると弁当をあけて将棋盤を向かい合って挟んだ。
どうやら将棋にも必殺技のようなものがあるらしいと知ったのも高校生になってからだった。
「んー、まずは棒銀じゃない？ 金を前にだして蟹にすんのも結構いいぞ？」
初心者が未開人にラテン語を教えるような感覚だったのだろう、友人の教えは投げやりだった。
真っ先に名前だけ覚えてまねたのが棒銀だったが、棒銀の実直さはしばしば相手に防がれた。
ぼくは棒銀以外は使おうと思わなかったし、棒銀すらまともに覚えちゃあいなかった。
桂馬で援護射撃をしたり、意味もなく矢倉を組んだり、百円玉を賭けて負けたりもした。
それでもやっぱり駒は美しかった。
香車のまっすぐな生き方も、桂馬の切り込み方も好きだった。
将棋がほとんど出来ないぼくたちは、駒をうごかして遊んでいたのだ。
駒の動きが対話だった。

しかし人はそれぞれの道を歩むものだ。
姉とぼくは将棋を指さなくなったし、将棋部の友人の現在をぼくは一切知らない。
ぼくはいま深夜に新聞配達のバイトをしている。
新聞を配りながら、駒と銀について考えていたら立原の詩が忽然とよみがえった。

その道は銀の道 私らは行くであらう
ひとりはなれ……（ひとりは一りを
タぐれになぜ待つことをおぼえたか）

夜には人をどこかへ迷わせてしまう異界への裂け目がある。
その巨大なクレバスに遭遇するために人は夜を歩くのだ。

夏というものは全くもって節操がない。
深夜だというのに無作法に泣きわめくヒグラシも、白色光に照らされたアスファルトも、呼吸さえしていない空白の道路も、みんなみんな甘ったるい。

どうして、ひとはひとりを夕暮れに待つことをおぼえたか。

決まっている。淋しいからだ。

こんな事を思い出すのもどうしようもなくみじめで、生皮を剥がすように淋しいからだ。

淋しい思いをしながら駒のことを考えているうちにまた、ぼくはぼく自身の「銀の道」を意識しなければならないことを覚悟する。

それは祝福された道ではないが、夜が明けるための道でもある。

銀色は淋しい色なのだ。

次回予告



他人との接点を最小限にとどめ生きてきた駒少女・角。

繰り返される戦争の中、少女はついに武器を手にとることを決意する。

「……大丈夫……私が……切り開くから……！」

冷たい鉄の鎌が相手の首へ振り下ろされる時、混沌を極める対局の時間は加速していく……

。

次回「角ちゃん心の向こうに」 次回もさーびすさーびすうー！

文章 半島

イラスト 若葉

vol.4で小説も発表したshogitygoo氏が、これまでのブログ記事をまとめた[『ものぐさ将棋観戦ブログ集成』](#)という本をパプーから出版した。ツイッターなどでは「巨匠」と言われる氏は、将棋観戦のガイドとなる記事をこれまでたくさん書いてきた。そしてその表紙をまるぺけさんが、解説をぜいらむさんが書いている。本誌でもお世話になっている方々である。

ここでは私とものぐさ将棋観戦ブログとの関係について少し触れさせてもらいたい。私がこのブログと出会ったのはそれほど古くなく、ツイッターを始めてしばらくたったところである。最初私は将棋のことはたまにつぶやくぐらいで、将棋ファンの方々のことも全く知らなかった。今から思うと、最初に会話ししたのはまるぺけさんだったような気がする。しばらくして将棋を観戦するディープなファン、いわゆる「観る将」という方々がいること、そして観戦しての感想などをブログで記事にしている人がいることを知った。ただ、当時の私はまだ「そんな人があるんだなー」という感想で、将棋観戦はするもののそれほどブログを読んでいなかったのである。

しかし忘れもしない、「羽生善治・吉増剛造「盤上の海、詩の宇宙」を再読して」(2010年07月01日)という記事により、私はものぐさブログに深く興味を持つようになった。私は詩誌の読書投稿欄に詩を出していながら、詩人のことをあまり知らなかった。よって、羽生と詩人の対談などというものがあることすら想像していなかったのである。この記事を読んで私は、これはこの本を読まねばならない、と思った。そして読んだ後、巨匠によって読むべき本をきちんと読まれた、と私は思った。ちなみに「羽生のアガペーと深浦のエロスー相思相愛問題をめぐって」(2010年06月09日)という記事の中で私の発言が少し引用されている。この頃からツイッター上で少しずつ会話をするようになったようである。

巨匠は思ったことを率直に、それでいながら角が立たないように書いている印象である。時にはクスッとするようなネタ的な記事も書くし、本当に引き出しの多い方である。そしてそんな氏の魅力をさらに引き出すのがぜいらむさんのおちょくりである。これは非常にいいおちょくりである。ぜいらむさんが細かいところをつつくと、巨匠はそれにいろんな角度から応じる。私自身も経験があるのだが、ぜいらむさんの投げ込む球は非常に打ち返しがいいがあるのだ。それ以外にも、ツイッター上で他のファンとのやりとりから生じた記事は結構あるだろう。その意味でこの本はshogitygoo氏のブログをまとめただけでなく、将棋ファンたちの歴史も反映されたものであると言える。

最近では将棋だけでなく、巨人ファン(巨匠)と阪神ファン(らくは)ということで会話させていただくこともあるのだが、ふとした瞬間に「しかし巨匠とはいったい誰なのだろう」という思いに駆られるのだ。これだけブログが有名で、ツイッターの発言も多い氏であるが、その実態はほとんどわかっていない。観る将の多くは公開対局やイベントなどに出かけたりするものだが、巨匠はあくまで自宅から観戦している模様である。それどころか「散歩をした」とか「買い物に行

った」とかそういうことすらほとんど書いているのを見たことがない。自宅でネットをして、本を読んで、野球を観て、音楽を聴く。それだけで人生を存分に楽しめる、そんなライフスタイルを提示している気すらする。もちろん語っていないところではどんな生活をしているのかまったくわからないのだが、私の想像の中では「新時代のかっこいい将棋好きのおじさん」、それがshogitygoo氏なのである。

ネット観戦にブログに電子書籍、新時代のツールが良質の将棋観戦記事に新しい息吹を与えた。そして、『駒.zone』の「友と書いてライバル」の誕生である。第二段の出版にはしばらくの時間が必要だろうが、ブログの更新は今後も続いていくはずだ。巨匠の新作を、これからも存分に楽しもうと思う。

shogitygoo氏のブログ [「ものぐさ将棋観戦ブログ」](#)

第五号、お届けです。

おかげさまで、非常に多くの方に読んでもらっている本誌。ただ、じゃあ今後どうするんだ、というのは悩むところです。新しいこともどんどんしたいのですが、これまで楽しまれてきたものも残したい。いやはや、先人たちの悩みを引き継いだわけです。

将棋を題材にした作品は世の中に多く出ているのですが、単に「アマチュアが書いたもの」が載っている、そういう一冊にはしたくないのです。ファンならではの視点やアマチュアだからこそ書ける内容、そういうものこそが本誌の味になっているのではないか。そんな思いから、これまで見たことのないような作品を今回は書いてみたつもりです。

と言いつつ、何でも載せるのです。駒.zoneは広場のような、遊び場のような、そんな場所であればと思います。

あ、あと、前号で写真物語が終わり、今号は「チェ的」をお休みしました。また私の書き下ろし小説もなしです。さらに一部で予告していた「どうぶつ化するポスト将棋」も次号以降に掲載する予定です。その意味でも今号はいつもとは趣の違うものになったのではないかと思います(け、決して原稿が間に合わなかったわけではっ)

今回も多くの方に協力していただきました。感謝感謝で四方に礼をしております。そして読者のみなさまにも感謝感謝です。礼をしすぎて首が痛くなってまいりました。六号も頑張って作りたいと思います。そしていずれは紙の駒.zoneも作れればと思っています。そんなわけで皆様、今後ともよろしくお願いいたします！

作者紹介

清水らくは

夏です。私夏休みのあるお仕事なので、この時期は執筆に割く時間を増やせるのです。ですが暑いと頭が働きます。そんなわけで、沖縄に行ったつもりになってみました。旅行記みたいな小説、いかがでしたでしょうか。私が書く将棋小説はどこかでリンクしていたのですが、今回ついに月萌さんたちの世界ともリンクしました。このまま「架空の将棋宇宙」がどんどん広がっていくのかもしれませんが。ただ、やっぱり現実が面白い。実在するプロ棋士たちの魅力が、私たちに将棋文芸を書かせてくれるわけです。

半島

「全くもって記事の趣旨がわからない」でおなじみの半島です。
ヌルい将棋ファン粹というの必要じゃ！という編集長の提案で末席に失礼させていただいております！
たまにはマトモな挨拶をね。うん。
詩とか短歌とか書きながらうーいうーいうっほっほーいと遊んでる大バカ者でございます。
駒.zoneは第一回から将棋短歌要員として参加させていただいているのですが、これほどまでに皆さんに愛される雑誌に成長してくれて、ぼくとしては嬉しいやら気が重いやら……（将棋ムズカシヨー）

後書きにかえまして今回のテーマだった「銀」で一首。

受肉するあなたの罪はやわらかい 銀樹へ固くはりつけられよ（半島）

いやんサディスティック♪ あと駒おむペンの次回予告の内容は嘘予告です。

まるぺけ

今回は夏の海辺のミナガーさんです。毎回どこかに駒柄を潜ませてますが、今回はもはや駒を帽子に乗せているというそのままの扱いとなっております。ところで月子さんの存在を忘れていたわけではありません。ありませんよ。ありませんったら。

若葉

夏ですね。夏といえば水着ですよ。ね。(私はもう数年間着ていません)
今回は鎌の形を工夫してみました。
...とりあえず最後に言い残したい事といえば、角ちゃんは超力持ちなんです。
超力持ちなんです。

(大事な事なので以下略)

贅楽夢

元々は「辻村君のコーナーにコメントくれませんか？」というお誘いだったのです。だから最初は辻村君に贈る言葉を書くつもりでした。

でも彼を見ていたら……懐いたり懐かれたり、傷ついたり傷つけられたり、傷つきたくなくて、あるいは傷つきたくなくて、心ならずも嘘をつくことになったり、嘘をつかれたり。そうこうしているうちに疲れてしまったり、疲れはてて希望を見失って溜息をついてしまったり、そういう経験をしただろう、これからしていくのだろう。そして、そういう幾つもの「つく」や「つかれる」の隙間に、妖怪が入り込んできたりするんだろうなあ……なんてことを思いつつ、寄稿させていただいた今回の小説でした。まあ、あくまで番外編の勝手な妄想裏設定ではありますけれども。

でも意外と、スネコスリは本当に辻村君に憑いているのかも……知れませんか？

ジェームズ・千駄ヶ谷



今回は自分の「あったらいいな」を文章にしてみました。妄想を具体化していく作業がすごく面白かったです。

じつは小説を書くのは中学生の時以来ですが、書き終えた後の黒歴史製作感は当時とかわりありません。次はもう少しまともなものを書きたいです。

ikkn

音声の研究者。ほとんどの人に「いっくんさん」と呼ばれるが、本当は「いっくん」と呼ばれたい。小中学生の頃はそう呼ばれていた。なお、幼稚園の頃は「たけちゃん」であった。

ふりごま

前号の「道場編」に続いて、今回は「大会編」を書きました。

ひとつひとつのシーンを深く掘り下げて小説にしたいという思いはあるのですが、筆力が足りません。

思い切って、全然違う小説も書いてみたのですが、途中で空中分解して没にしました。

また次回、頑張りたいと思います。

皆川許心

上石三郎

跳馬

狐

ぴろち

写真提供

紫野

無責任・駒.zone編集部

編集長 清水らくは @rakuha

広報 金本月子 @tsukiko_sann

営業 皆川許心 @MinagawaMotomi

[ブログ](#)

[Google+](#)

[メールマガジン](#)

駒.zone

vol.5

